

---

---

# SLAVIC RESEARCH CENTER NEWS No.125 May 2011

---

---



グローバルCOE

◆ 国際シンポジウム「北朝鮮をめぐる境界の政治」の開催 ◆



李鍾奭氏(元韓国統一部長官)と岩下 GCOE 拠点リーダー  
える報告を一堂に集めたことにあり、韓国語の報告に対しては同時通訳が提供され、市民にも広く開放されました。

基調報告に立った李鍾奭(元韓国統一部長官)氏は、盧武鉉政権の北朝鮮政策を主導した人物で、余り知られていない中朝 1300km 国境の国境線画定過程について詳細に報告されました。その中で、当時の中国を取り巻く国際情勢から、北朝鮮にとって有利な線引きがおこなわれたこと、国境線上にある河川は共同利用であり、河川の三角州、砂洲や島は一々帰属を画定させた等、興味深い史実が紹介されました。また、現在の国際情勢については、その人口、国土、経済規模から中国を大国として許容し、かつ北朝鮮を疎外するのではなく、支援・協力し、東アジア共同体の枠組みで対立を緩和することを李氏は主張しました。

第二部の森善宣(佐賀大学)報告は、南北が「対立の相互依存」により、対立・分断を政権維持の材料として利用してきた歴史が語られ、太陽政策により変容したものの、今日また逆戻りしている状況が説明されました。韓恵仁(建国大学校)報告は、サハリン・樺太の朝鮮人が、戦後の境界引き直しにより、日本から見捨てられ、韓国に帰還した人々も当局の反日感情を煽る道具として利用され、現在でも韓国社会に溶け込められない現状が報告され

3月13日、GCOE・SRC国際シンポジウム「北朝鮮をめぐる境界の政治」がスラブ研究センター大会議室で開催されました。東北地方太平洋沖地震の翌々日という条件でしたが、報告者が九州、韓国から札幌入りであったため、開催に漕ぎつけることができました。

本セミナーの特色は、今日の朝鮮半島の境界を、「38度線」にとどまらず、様々なアプローチから捉



講演する洪翼杓氏（韓国対外経済政策研究所：KIEP）

ました。洪翼杓（韓国対外経済政策研究所：KIEP）報告は、北朝鮮の対外経済政策について、かつては日本が最大の貿易相手国であったが、拉致問題で落ち込み、南北経済協力で穴埋めしようとしていること、中朝経済協力では中国は北朝鮮に対し「開放」を強制していないが、自分たちの利害に関わる場所にしか投資していない、といった現実が紹介されました。

総じて、4報告とも、政治的偏見を排して、現状を客観的に把握した上での議論がなされており、特に韓国の政策当事者であった二名の報告は、韓国政府の北朝鮮政策を理解する上で極めて有意義でした。おそらく、多くの利害者が殺到するであろう東京開催では（無論、大阪でも）、ここまで率直な議論をおこなうことができたのかと考えると、図らずも札幌という地の利が活かされた感があります。[藤森]

## 新学術領域研究

### ◆ 「ロシアのエネルギーと環境問題の現状」研究会開かれる ◆

2月26日（土）に「ロシアのエネルギーと環境問題の現状」研究会がセンター大会議室で開かれました。この研究会は、環境省地球環境研究総合推進費（E-0901）「気候変動の国際枠組み交渉に対する主要国の政策決定に関する研究」の助成によるもので、新学術領域研究「比較地域大国論」の第3班「持続的経済発展の可能性」が共催しました。また、エネルギー問題の専門家であり、2010年度のセンター外国人研究員である Feng Yujun 氏



研究会のようす

と氏の紹介で北京から来られた CNPC（中国石油天然ガス集団公司）の2人の研究者が参加しました。このため、ロシアのエネルギーと環境問題の現状について、日中の専門家が議論するという場になりました（日本語・中国語の逐語通訳が付きましました）。研究会では、ロシアの気候変動問題への対応や、ロシア東部地域のエネルギー開発の中国や日本への影響などをめぐって議論が交わされました。プログラムは以下のとおりでした。[田畑]

セッション1：13:00～14:30

徳永昌弘（関西大学）「新興国と地球環境問題：ロシアのケース」

司会：上垣彰（西南学院大学） 討論者：片山博文（桜美林大学）；服部倫卓（ロシア NIS 貿易会）

セッション2：14:50～18:00

Feng Yujun（中国現代国際問題研究所／センター外国人研究員）「国際天然ガス市場の変化と中露天然ガス協力の展望」

本村真澄（JOGMEC）「北東アジアへのエネルギーフロー」

Wang Haiyan（CNPC）「CNPCの国際的な石油・ガス協力」

司会：田畑伸一郎（北海道大学） 討論者：金野雄五（みずほ総合研究所）；劉旭（北海道大学）

### ◆ 新学術領域プロジェクト研究員の今年度の勤務地 ◆

前年途中に採用された福田宏さんを除いて、今年新たに4名のプロジェクト研究員が決まりました。選考に当たっては、22名の応募者の中から厳正な審査がおこなわれました。雇用期間は2011～2012年度の2年間です。〔後藤〕

氏名	博士号取得大学	2011年度勤務地	主たる研究協力班
三輪 博樹	筑波大学（単位取得退学）	早稲田大学	第2班
星野 真	神戸大学	北海道大学	第3班
福田 宏	北海道大学	北海道大学	第4班
小松 久恵	Jawaharlal Nehru University (India)	北海道大学	第5班
前田 しほ	北海道大学	北海道大学	第6班

### ◆ 今年度公募研究の採択結果 ◆

2011年度の公募研究の結果が決まりました。文科省の専門委員会による厳正な審査の結果、以下の研究が採択されました。研究期間は、2011～2012年度の2年間です。〔後藤〕

研究課題：「東アジア諸都市におけるサブカルチャーの生産・流通・受容と若者の心理」

研究代表者：千野拓政

所属機関：早稲田大学大学院文学研究科

### ◆ 新学術領域研究第5回国際シンポジウム・全体集会 ◆

2011年7月7日（木）～8日（金）の日程で、冷戦期のユーラシア国際関係をテーマにした国際シンポジウムが、北海道大学スラブ研究センターを会場に開かれます。本大会は、スラブ研究センター定例の夏期シンポジウムとリンクした形でおこなわれます。プログラム等の詳細については現在検討中です。確定次第、新学術領域研究HP上でお知らせします。7月9日（土）には本領域研究の全体集会が同じ会場で開かれます。この集会の詳細についても、決まり次第、HP上でお知らせします。〔後藤〕

<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/rp/index.html>

## 訃報 山下祥子さん



1998年9月から12年7ヵ月間あまり、センター情報資料部の助手を務めてこられた山下祥子さんが4月20日未明、腸閉塞で亡くなりました。満42歳、検査入院中の思いがけない急死でした。

山下さんはセンターの情報通信関連の主任として、ホームページのデザイン・管理、サーバー管理、コンピュータ通信環境の整備と保守、学外との通信の管理などの業務を一手に引き受けてきました。センター外の方々の需要に敏感であり、セキュリティやプライバシー保護など先端的な問題をめぐる意識も極めて先鋭で、同僚から深い信頼を得ていました。スラブ研究センターのホームページが世界中の専門家から好ましい評価を得ているのも、山下さんの貢献によるところが大きかったと思われまます。

また職場の人間関係にも細やかな気遣いを絶やさず、**山下祥子さん**  
**着装では教授の免状をお持ちでした** 地道に努力している人たちの慰労などの企画をさりげなく演出する配慮を見せてくださいました。コンピュータグラフィックを使ったユニークなアートではいつもわたしたちを和ませてくださいました。

山下さんのご貢献に感謝し、心からご冥福を祈りたいと思います。[望月]

## 研究の最前線

### ◆ 共同研究員 ◆

センターは以前から国内の優れたスラブ地域研究者を共同研究員に委嘱してきましたが、共同利用・共同研究拠点としての活動に合わせてこれまでの制度に若干の見直しを加え、2011年度から新たに以下のような形で、共同研究員制度を発足させることになりました。

#### ①制度の趣旨・規定（センター共同研究員内規より抜粋）：

- 1) 共同研究員はセンターの研究計画に基づき、共同研究をおこなう。
- 2) 共同研究員は、センターの施設、文献、資料等を利用することができる。
- 3) 共同研究員は、センターの研究部門からの推薦に基づき、拠点運営委員会に諮り委嘱する。
- 4) 共同研究員の研究期間（委嘱期間）は2年とする（再任あり）。

#### ②委嘱対象：

- 1) センターでおこなっているプロジェクトなど共同研究の分担者
- 2) センターの活動に積極的に貢献していただいている研究者
- 3) 公募によるプロジェクト型共同研究の主催者
- 4) GCOE・新学術共同研究員：同プロジェクトにかかわる研究者（スラブ地域研究者以外も含む）

なお、従来特に長期にわたってセンターの活動に貢献していただいた研究者、および北海道大学の諸部局で研究している研究者について、それぞれ「特別共同研究員」「学内共同研究員」という名称で別カテゴリーとしてきましたが、2010年度の制度見直しの結果、大型共同研究プロジェクトに特化してかわる共同研究員（上記②-4）を除き、全体を一つの枠にすることとしました。[望月]

#### 《共同研究員：2011～2012年度》

赤尾光春（大阪大）、秋田茂（大阪大）、秋山晋吾（一橋大）、秋山徹（学振特別研究員）、安達祐子（上智大）、池田嘉郎（東京理科大）、諫早勇一（同志社大）、石井明、井上まどか（清泉女子大）、今西一（小樽商科大）、上垣彰（西南学院大）、上野俊彦（上智大）、江淵直人（北大低温科学研究所）、大串敦（大阪経済法科大）、大野成樹（旭川大）、岡奈津子（アジア経済研究所）、小澤実（立教大）、貝澤哉（早稲田大）、片山博文（桜美林大）、亀山郁夫（東京外国語大）、川島真（東京大）、久保慶一（早稲田大）、小松久男（東京大）、小森宏美（早稲田大）、金野雄五（みずほ総合研究所）、酒井啓子（東京外国語大）、佐々木史郎（国立民族学博物館）、佐原徹哉（明治大）、塩川伸明（東京大）、塩原俊彦（高知大）、篠原琢（東京外国語大）、志摩園子（昭和女子大）、下里俊行（上越教育大）、下斗米伸夫（法政大）、白岩孝行（北大低温科学研究所）、新免康（中央大）、杉浦秀一（北大メディア・コミュニケーション研究院）、鈴木一人（北大公共政策学連携研究部）、鈴木淳一（札幌大）、鈴木正美（新潟大）、関口時正（東京外国語大）、仙石学（西南学院大）、高倉浩樹（東北大）、武田雅哉（北大文学研究科）、田畑朋子、月村太郎（同志社大）、鶴見太郎（学振特別研究員）、唐亮（早稲田大）、徳永昌弘（関西大）、等々力政彦、鳥山祐介（千葉大）、中田瑞穂（名古屋大）、中地美枝（北大文学研究科）、中野潤三（鈴鹿国際大）、中村唯史（山形大）、中村靖（横浜国立大）、中村研一（北大法学研究科）、長興進（早稲田大）、西山克典（静岡県立大）、沼野充義（東京大）、根村亮（新潟工科大）、野田仁（早稲田大）、野中進（埼玉大）、乗松亨平（東京大）、橋本聡（北大法学研究科）、濱本真実（東京大）、平田武（東北大）、廣瀬陽子（慶應義塾大）、樋渡雅人（北大経済学研究科）、藤原潤子（総合地球環境学研究所）、前田弘毅（首都大学東京）、松枝大治（北大総合博物館）、松戸清裕（北海学園大）、松村岳志（大東文化大）、溝端佐登史（京都大）、三谷恵子（京都大）、六鹿茂夫（静岡県立大）、毛里和子（早稲田大）、望月恒子（北大文学研究科）、本村真澄（石油天然ガス・金属鉱物資源機構）、守川知子（北大文学研究科）、谷古宇尚（北大文学研究科）、山崎幸治（北大アイヌ・先住民研究センター）、山根聡（大阪大）、湯浅剛（防衛省防衛研究所）、横手慎二（慶應義塾大）、吉田修（広島大）、吉村貴之（東京外国語大）、渡邊昭子（大阪教育大）、渡邊浩平（北大メディア・コミュニケーション研究院）

#### 《新学術共同研究員》

後藤正憲、福田宏、小松久恵、住家正芳、任哲、星野真、劉旭（以上、任期：2010年10月1日～2012年9月30日）

#### 《GCOE 共同研究員》

青島陽子（愛知大）、浅羽祐樹（山口県立大）、新井直樹（福岡アジア都市研究所）、荒井幸康、飯尾唯紀（城西大）、片原栄一（防衛省防衛研究所）、加峯隆義（九州経済調査協会）、金成浩（琉球大）、ゲン・アイン・フォン（愛知淑徳大）、草野佳矢子、黒岩幸子（岩手県立大）、佐藤学（沖縄国際大）、佐藤由紀（早稲田大）、田村慶子（北九州市立大）、長嶋俊介（鹿児島大）、仲地博（沖縄大）、兵頭慎治（防衛省防衛研究所）、プフ・アレクサンダー（筑波大）、古川浩司（中京大）、堀江典生（富山大）、前田しほ、松原孝俊（九州大）、水谷由佳（北大アイヌ・先住民研究センター）、三村光弘（環日本海経済研究所）、山上博信（国立民族学博物館）、山田吉彦（東海大）（以上、任期：2010年4月1日～2012年3月31日）

加藤美保子、左近幸村、宮本万里（人間文化研究機構）（以上、任期：2011年4月1日～2013年3月31日）

### ◆ 名誉研究員 ◆

センターでは2011年度から、センターの活動に多大な貢献をいただいた研究者を名誉研究員に委嘱することとしました。名誉研究員はセンター協議会員の議を経てセンター長が決定します。名誉研究員の方々には、センターの施設、設備、文献及び資料が利用いただけます。なお、この制度の導入に伴い、2010年度までであった「特別共同研究員」の категорияは廃止されました。[望月]

#### 《名誉研究員》

荒又重雄（北大名誉教授）、伊東孝之（早稲田大）、井上紘一（北大名誉教授）、岩田昌征（千葉大名誉教授）、宇多文雄（上智大）、加藤九祚（国立民族学博物館名誉教授）、川端香男里（東京大名誉教授）、木村崇（京都大名誉教授）、木村汎（北大名誉教授）、栗生澤猛夫（同）、高田和夫（九州大名誉教授）、竹田正直（北大名誉教授）、佐藤経明（横浜市立大名誉教授）、中村喜和（一橋大名誉教授）、西村可明（環日本海経済研究所代表理事）、長谷川毅（カリフォルニア大）、原暉之（北大名誉教授）、平井友義（大阪市立大名誉教授）、松田潤（札幌大女子短期大部）、皆川修吾（北大名誉教授）、南塚信吾（法政大）、望月喜市（北大名誉教授）、百瀬宏（津田塾大名誉教授）、安井亮平（早稲田大名誉教授）、和田春樹（東京大名誉教授）

### ◆ ロシア文学研究所との交流協定 ◆



バグノ所長と望月センター長

センターとロシア科学アカデミーロシア文学研究所（プーシキン館）は、このたび研究者・大学院生による教育的学術的な相互交流について、両者が関心を有する研究テーマにおける協力を推進するという趣旨の交流協定を締結しました。同研究所からはすでにヴラジーミル・トゥニマノフ、ヴラジーミル・コテリニコフ、アレクサンドル・ボブロフ、マリヤ・マリコヴァなどのロシア文学・文化研究者を外国人客員として招聘してきた実績があり、今後ロシア文化研究を中心とした領域で交流が一層活発

になることが期待されます。同研究所のフセヴォロト・バグノ所長は目下「ロシアフォークロアと文学における異民族間・異宗教間関係のモチーフ」といったテーマによる共同研究への参加者を求めているようです。センターのおこなっているユーラシア地域大国の比較研究にもつながりがありそうです。興味のある方はセンター望月まで声をかけください。[望月]

### ◆ ロシア図書館の代表訪問 ◆

日露青年交流センターの招聘によるロシアの若手図書館職員の一団が、3月15日午前センターを訪問しました。サンクト・ペテルブルグのボリス・エリツィン記念大統領図書館を中心としてモスクワ、オムスク、クラスノヤルスク、チュメニなど諸地域の図書館代表を交えた10人のグループで、北大附属図書館とセンター図書室の見学の後、兎内准教授、越野助教をはじめとするセンターの若手職員や学生と対談をおこないました。上記図書館はロシアの

アーカイヴ資料を含む諸資料の電子化を積極的に進めている組織で、代表の肩書にも IT 課長とか主任プログラマーなどが混じていました。この関連で日本の図書館に関しても電子化の状況に深い関心を持っており、日本にあるロシア語資料や図像資料の電子化にも興味を示していました。電子化情報の国際的な相互利用システムの開発など、われわれとしても興味深いところ。ちなみにサンクト・ペテルブルグの同図書館はセンターの若手研究者や院生にも使い勝手がいいと好評のようです。[望月]



センターの資料に興味深げに見る訪問者

### ◆ 公開講座 ◆

#### 《スラブ・ユーラシアで躍動する人々》開講中

ロシアの歴史は、移動する人間の軌跡です。しかし、ロシア人だけが広大な空間を占有すべく動いていたのではありません。過去 500 年、ユーラシア大陸の中心部で国家を建設する中でロシア人は、様々な移動する民族に遭遇し、彼らに頼り、ある時には競合してきました。また、周辺の民族もロシア人の作り出した空間に躍動の機会を見出してきました。さらに、これらの人々は様々な理由で国境を越え、個々の経験に基づく様々なロシア像を世界各地に広めてきました。

今年のスラブ研究センターの公開講座は、ロシア史を彩る 7 つの民族を取り上げて、私たち日本人のロシア観が、ロシアの持つ多様な顔の一部に基づいているにすぎないことを理解していただくことをめざしております。

今回は、新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」の第 5 班「国家の輪郭と越境」との共催ともなっています。[長縄]

日 程	講 義 題 目	講 師
第 1 回 5 月 9 日 (月)	ロシア人：歴史における拡張と統合	静岡県立大学国際関係学部 教授 西山克典
第 2 回 5 月 13 日 (金)	アルメニア人：文明の潮目で	東京外国語大学アジア・アフリカ 言語文化研究所 研究員 吉村貴之
第 3 回 5 月 16 日 (月)	ドイツ人：二度の大戦に翻弄された人々たち	愛知県立大学外国語学部 講師 半谷史郎
第 4 回 5 月 20 日 (金)	ユダヤ人：共存と排除の 200 年	立教大学文学部 特任教授 高尾千津子
第 5 回 5 月 23 日 (月)	タタール人：祖国とイスラーム世界の狭間で	北海道大学スラブ研究センター 准教授 長縄 宣博
第 6 回 5 月 27 日 (金)	中国人：脅威と共生の間で	富山大学極東地域研究センター 教授 堀江典生
第 7 回 5 月 30 日 (月)	日本人：ロシア極東における戦争と水産業	新潟国際情報大学情報文化学部 准教授 神長英輔

## ◆ 第4期 ITP 派遣者が決定 ◆

2月15日から3月31日までおこなわれた第4期 ITP 派遣者の追加募集には2名が応募し、慎重な審査の結果、加藤美保子さん（北海道大学スラブ研究センター GCOE 共同研究員）が選ばれました。その結果、派遣者の派遣先も下表のように決まりました。

氏名	現職	博士号取得先	研究テーマ	派遣先
佐藤 圭史	北海道大学スラブ研究センター GCOE 共同研究員	九州大学大学院 比較社会文化学府 (2009)	CIS 諸国における非承認国家と紛争	ハーヴァード大学 デイヴィス・センター
劉 旭	北海道大学スラブ研究センター 学術研究員	北海道大学大学院 文学研究科 (2010)	ロシアの石油ガス生産と環境	ジョージ・ワシントン 大学エリオット校欧・露・ユーラシア研究所
加藤美保子	北海道大学スラブ研究センター GCOE 共同研究員	北海道大学大学院 文学研究科 (2011 見込)	ロシアの安全保障とアジア太平洋の地域主義	オックスフォード大学 聖アントニー校

すでに4月20日には派遣者へのブリーフィングがおこなわれ、派遣中の生活や活動についての注意事項が伝えられています。派遣者は、6月中には派遣先に向かう予定です。[松里・越野]

## ◆ データベース「中東欧・ソ連諸国の選挙データ」 ◆

仙石学西南学院大学教授のプロジェクト型公募研究「ポスト社会主義国における選挙データの体系的整理」（2009-2010年度）の成果として、下記の「中東欧・ソ連諸国の選挙データ」データベースが、センターホームページに掲載されました。

[http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/election\\_europe/index.html](http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/election_europe/index.html)

このサイトでは、社会主義体制が解体し自由選挙がおこなわれるようになった中東欧および旧ソ連諸国における、これまでの国会議員選挙、大統領が公選で選出される国の大統領選挙、および欧州連合（EU）加盟国の欧州議会議員選挙の結果を、選挙規則や政党に関する基礎的な情報とあわせて公開しています。[望月]

## ◆ 専任研究員セミナー ◆

ニュース前号以降、専任セミナーが以下のように開催されました。[家田]

2011年2月17日：望月哲男「恥と理想：『未成年』の世界」  
センター外コメンテータ：中村唯史氏（山形大学）

今回のセミナーで議論された望月論文は昨年刊行された亀山・望月編『現代思想 ドストエフスキー』に収録された論文「恥と理想 『未成年』の世界」でした。この論文の主題は、ドストエフスキーの作品における恥のテーマをめぐる議論で、小説と通過儀礼の関連、恥の現象学、恥と理想の関係といった話題をめぐる議論が交わされました。恥の文化と罪の文化の比較論におけるロシアの位置といった問題も提起されました。

2月21日：家田修「ハンガリー赤泥流出事故に見る東欧とEUの見えざる境界」  
センター外コメンテータ：児矢野マリ（北海道大学）

家田論文では昨年ハンガリーで起きた廃液（赤泥）流出事故が取り上げられ、赤泥の有害性をめぐるハンガリー国内とEUにおける議論と法規制が跡づけられ、むしろハンガリー

における環境規制の方が厳しいという、通念とは逆の事態が生じていることが指摘されました。これに対し、国際環境法を専門にしている児矢野氏から、EUにおける廃棄物規制の変遷や世界的な廃棄物投棄や移動に関する観点などから質問が出され、専任の研究者からは社会主義時代やEU政治を含めた論点の整理が必要などの意見が出されました。

3月2日：ウルフ・ディビッド“Comrade Stalin and the Chinese Way in South and Southeast Asia”

センター外コメンテータ：横手慎二（慶応大学）

ウルフ論文はウルフ氏の大きな研究テーマである冷戦史研究と、近年追究している晩年のスターンの対外政策研究のそれぞれの成果をつなぎ合わせたもので、とりわけインドとスターリンの関係に大きな焦点が当てられています。インド共産党の内部事情や国情との関わりは戦後日本の共産党・ソ連関係を想起させるものでした。討論者の横手慎二氏からは冷戦史全体、ソ連の外交とスターリン外交の相関などの観点から鋭い質問が提示されました。

3月25日：長縄宣博「総力戦の中のムスリム社会と公共圏：20世紀初頭のヴォルガ・ウラル地域を中心に」

センター外コメンテータ：橋本伸也（関西学院大学）

この論文は、公共圏とジェンダーを切り口に、ヨーロッパ・ロシアのムスリムが経験した日露戦争期と第一次世界大戦期の銃後の社会のあり方を論じたものです。近年、公共圏の発達を民主主義の誕生に直結させ、その相関が生じた西欧と非西欧を峻別する見方が重要な修正を迫られていますが、この論文は、そうした見直しの地平をロシアのムスリム社会にまで拡大するものです。それによって、とりわけ帝政末期の戦時においては、諸宗派を個別に容認することで統治をおこなう古い国制の内部でも、新しい公共圏が発達する契機があったことが明らかになりました。

全体の討論では、公共圏はやはり統治制度の外に発展したものではないのか、両者の緊張関係がムスリム社会内部に主導権をめぐる政治を生むことはなかったのか、戦時の慈善活動が目指した「ロシア・ムスリム」の一体性とムスリム内部の様々なナショナリズムの発展との関係はどのように理解すべきか、女性の社会進出といっても、結局は従来から女性に期待されていた役割やイメージが公共の場で焼き直されたにすぎないのではないかと、といった本質的な問題が次々に提起されました。

3月28日：野町素己「カシュブ語およびポーランド語における所有完了及び関連する時制形式：言語類型論と言語接触論に基づく比較分析と記述」

センター外コメンテータ：ロムアルド・フシチャ（ワルシャワ大学 / ヤゲロー大学）

野町論文は日本ではほとんど馴染みのないカシュブ語を巡る論争について、幅広い言語学的な視点から、独自の見解を展開したものであり、ポーランドを代表する言語学者で日本学者でもある討論者のフシチャ教授から「開拓的研究」とであると非常に高く評されました。カシュブ語を独自の原語とみるか、ポーランド語の方言とみるかで意見は分かれているようですが、「所有完了」という視点からスラブ語全体の中で、つまり南スラブ語、西スラブ語、東スラブ語という視野の中で、さらにはスラブ語以外の言語をも射程に入れてカシュブ語を位置付ける試みは、スラブ諸語に精通している野町氏ならではの議論でした。

フシチャ氏は今回の討論を日本語で準備され、実際、見事な日本語でお話されました。ポーランドからは以前、マエヴィッチ教授がセンターに滞在したことがありましたが、センターに言語学の専門家が加わって、さらに長縄氏のようなイスラーム世界にも通じた歴史家が活躍することで、センターがカバーする領域が一挙に広がった感があります。

◆ 研究会活動 ◆

ニュース 124 号以降の、センターでおこなわれた北海道スラブ研究会、センターセミナー、新学術領域研究会、GCOE 研究会、世界文学研究会、北海道中央ユーラシア研究会、及び昼食懇談会の活動は以下の通りです（前ページまでに記事のあるものは除く）。[大須賀]

- 2月 3日 鈴木健太（東京大・院）「ユーゴスラヴィア解体におけるナショナリズム：1980年代末のセルビアにみる政治言説と『反官僚主義革命』」（鈴木・中村基金奨励研究員報告会）
- 2月 8日 堀江典生（富山大）「ロシア極東地域農業と外国人労働者」（客員研究員セミナー）
- 2月 14日 シャムシャド・ハーン（インド防衛研究所（IDSA）／新学術外国人プロジェクト研究員）「インドと日本の戦略関係：問題点と期待点、そして将来の課題」（新学術領域研究会）
- 2月 16日 中村唯史（山形大）「アウステルリッツの空をめぐる：トルストイ『戦争と平和』とバフチンによるその批判」；阿部賢一（立教大）「20世紀のチェコ文学における「ロマ」の表象」（客員研究員セミナー）
- 2月 22日 阪本秀昭（天理大）「極東地方古儀式派村の信仰生活と家族・親族構造」（客員研究員セミナー）
- 2月 24日 D, ランセル（インディアナ大、米国／センター）“What Is Public, What Is Private: Sale of National and Natural Heritage Sites to Private Developers in Contemporary Russia”（センター・セミナー）
- 2月 25日 小椋彩（東京大）「うつろう境界の物語：オルガ・トカルチュク『昼の家、夜の家』をめぐる」（世界文学研究会共催・GCOE・SRC 特別セミナー）
- 3月 1日 「近代ロシア・プラトニズムの総合的研究」研究会 兎内勇津流（センター）「アレクサンドル1世時代のフィラレートとその周辺」；坂庭淳史（早稲田大）「チャダーエフとプラトン」；杉浦秀一（北大国際広報メディア研究院）「ソロヴィヨフとトルストイにおけるプラトン」；渡辺圭「長司祭アレクサンドル・メーニの『宗教の歴史』におけるプラトンとキリスト」；下里俊行（上越教育大）「近代におけるプラトニズムをめぐる諸問題」；室井禎之（早稲田大）「言語哲学におけるプラトニズム」；今仁直人（一橋大）「感受性の政治学をめぐる一考察」；根村亮（新潟工科大）「エヴゲニイ・トルベツコーイのプラトン研究」；北見諭（神戸市外国語大）「ブルガーコフの『名の哲学』におけるプラトン主義」；貝澤哉（早稲田大）「アレクセイ・ローセフ『讃名論とプラトニズム』紹介」
- 3月 2日 大平陽一（天理大）「カレル・タイゲとロマン・ヤーコブソン：2人の社会主義リアリズム批判とアヴァンギャルド擁護」（客員研究員セミナー）
- 3月 3日 J. ネクヴァピル（カレル大、チェコ）“Old Borders in New Contexts: On the Language Situation in Multinational Companies Operating in Central Europe”（GCOE・SRC 特別セミナー）
- 3月 5-6日 現代ロシア文学研究／ヴォルガ文化研究合同研究会 佐藤亮太郎（北大）「ジャンルとしてのソ連・ロシア戦争映画研究：D. ヤングブラッドの著作から」；松下隆志（北大）「ロシアのポストモダン文学の現在：パーヴェル・ベッベルシテインとミハイル・エリザーロフの作品を中心に」；岩本和久（稚内北星学園大）「現代ロシア文学における『過去』の描かれ方」；高橋沙奈美（北大）、桜間瑛（北大）、井上岳彦（北大）、望月哲男（北大）「ヴォルガ研究と調査旅行に関して」；三浦清美（電通大）「歴史的 ヴォルガ：ヴォルガがロシアの川となるまで」；望月哲男（センター）「ヴォルガとロシア文学（1850年代文人調査旅行を中心に）」；鈴木正美（新潟大）「新版『ヴォルガ・ヴォルガ』映画と解説」
- 3月 9日 橋本順光（阪大）「境界を越える義経ジンギスカン伝説：大陸雄飛論から冒険小説まで」（GCOE・SRC 特別セミナー）
- 3月 10日 D. シュテルン（ゲント大、ベルギー）“Negotiating Goods and Languages on Cross-border Retail Markets in the Postsocialist Space”（GCOE・SRC 特別セミナー）
- 3月 11日 国際シンポジウム「ユーラシアをめぐる日印対話」 詳細：<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/jp/seminors/src/2011.html#3-11>
- 3月 18日 林忠行（センター）「チェコとスロヴァキアの国境について」（特別講演：第12回ボーダースタディーズ・セミナー）

- 3月19-21日「東欧・ロシア史学史研究会」秋山晋吾（一橋大）、姉川雄大（千葉大）、飯尾唯紀（城西大）、鈴木広和（大阪大）、戸谷浩（明治学院大）、三苫民雄（愛知産業大）、山本明代（名古屋市立大）、渡邊昭子（大阪教育大）
- 3月29日 志摩園子（昭和女子大）「独立国家ラトヴィヤ、第一次世界大戦後の国際社会への道」（客員研究員セミナー）
- 3月30日 劉旭（センター）「資源開発と環境：ロシアの場合」（GCOE・SRC 研究員セミナー）  
R. フシチャ（ワルシャワ大、ポーランド）「国家の移動と国語の引っ越し：戦後のポーランドと言葉の運命」（北海道スラブ研究会）
- 4月8日 星野真（センター）「中国のニセモノ事情」（昼食懇談会）
- 4月25日 加藤美保子（センター）「初期ロシア外交の再検討（1992年1月～1996年1月）：ヨーロッパ安全保障の文脈から」（GCOE・SRC 研究員セミナー）
- 4月27日 岩下明裕（センター）「ボーダースタディーズの挑戦：ミュージアムと映像」（GCOE ボーダースタディーズ・セミナー）

## 人事の動き

### ◆ 教員の退職者 ◆

#### 荒井信雄教授：定年退職

2003年5月札幌国際大学助教授からセンター教授に就任、シベリア・極東部門でペレストロイカ以降の極東における経済・社会・政治の動態および第二次大戦後のサハリン史などを研究されました。北海道を中心舞台とした日露経済関係、漁業関係の研究で地元貢献し、シベリア・極東の研究者・学術団体との間の交流を深めました。

#### 林忠行教授：退職

1994年4月広島大学教授からセンター教授に就任、東欧比較政治、チェコスロヴァキア政治外交史を専門とし、両大戦間期外交、現代の政党政治などの分野で日本の学界をリードしました。96年4月から2年間センター長、2006年4月から5年間北大理事・副学長を務め、研究の環境整備にも尽力されました。4月以降京都女子大にお勤めです。[望月]

### ◆ 新任研究員紹介 ◆

4月からセンターに着任された方および身分が変わった方。カッコ内は仕事場所。なお新学術領域プロジェクト研究員については、新学術領域研究のコーナーで紹介しています。

藤森信吉 助教（プロジェクト室）

後藤正憲 助教（プロジェクト室）

地田徹朗 学術研究員（GCOE）（プロジェクトスペース）

留任の研究員については紹介を省略させていただきます。詳しくはセンターホームページを参照願います。[望月]

### ◆ 学術研究員の異動 ◆

宮本万里学術研究員が4月から人間文化研究機構・地域研究推進センター研究員に就任されました。[望月]

## ◆ 事務職員 ◆

峯田学事務係長は、北大病院に移られました。高橋磨由子事務補助員は退職されました。[望月]  
 新任紹介：村岡健一郎 事務係長（事務室）；千葉海 事務補助員（図書室）

## ◆ 2011年度の客員教授 ◆

公募していました客員教授は審査の結果、次の6名の方々をお願いすることになりました。[編集部]

氏名	所属	研究テーマ
阪本秀昭	天理大学国際学部	ハバロフスク地方の古儀式派村落の家族・親族構造：18、19世紀ロシア農村の大家族制との比較において
中村唯史	山形大学人文学部	20世紀ロシア文学の詩学と創造にみる言語観
大平陽一	天理大学国際学部	カレル・タイゲとロシア構成主義
豊川浩一	明治大学文学部	18世紀啓蒙主義と学術遠征：「ヨーロッパ的ロシア人」の形成
仙石 学	西南学院大学法学部	中東欧諸国における福祉政策と経済政策の連関
麓 慎一	新潟大学教育学部	ロシア領アメリカ（アラスカ）の売却と千島列島：環太平洋における海洋秩序の変容と再編を中心に

## 研究出張報告：

## インド研究者によるロシア出張の記録

## 三輪博樹（プロジェクト研究員）

新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」が中間評価でA評価を受けたおかげで、内政班を含むいくつかの班が追加予算を支給された。これを使って、2011年2月22日から3月7日までおよそ2週間の日程で、ロシアに出張させていただいた。滞在先は、日程の前半は北カフカース地方・ダゲスタン共和国の首都マハチカラ、後半はモスクワであった。

私の専門はインドの国内政治であり、最近では、インドにおける民主主義の安定性や、国家統合の問題などに特に関心を持っている。ダゲスタン共和国を出張先に選んだ理由は、多くの民族が共存し、イスラム教というロシアでは少数派の宗教を信仰する人々が人口の多数を占めるダゲスタンの事例と、インドのカシミール地方や北東部諸州などの事例を比較することによって、多民族の共存、国家統合、政治や社会の安定の実現、などの問題に関して何らかの知見が得られるのではないかと考えたからである。また、今回の出張先を決定する際には、北海道大学・スラブ研究センターの松里公孝教授のアドバイスも大きかった。

私はロシア語をまったく理解できず、ロシア語での挨拶すらできないという有様であるため、日程の前半には松里教授が通訳も兼ねて同行してくださった。後半には、ロシア科学アカデミー民族学研究所の研究員であるナタリヤ・ゾトヴァさんに、通訳兼コーディネーターをお願いした。通訳を通してのやり取りはもどかしいものではあったが、私は聞き取り調査に際してICレコーダーなどの録音機器は使わない主義であるため、質問・通訳・回答・通訳というリズムは、インタビューのメモを取る上では非常にやりやすかった。お二人の先生方には心から感謝を申し上げたい。

最初の目的地であるマハチカラへは日本からの直行便はないため、2月22日にまずはモスクワへ向かい、1泊した後、翌23日に国内線でマハチカラに向かうこととなった。同行して

いただいた松里教授は、モスクワからマハチカラへ向かう際に、空港関係者や警察関係者などとの間でトラブルが発生する可能性をひどく心配しておられたが、実際には拍子抜けするほどスムーズな移動だった。空港の警備は確かに厳重だったが、テロの危険に晒されている国ではごく当たり前の警備体制であると思えた。マハチカラの空港では、ダゲスタン大学のマゴメド・ラスル・イブラギモフ教授が我々を迎えてくださり、その



マハチカラ市内

後、同教授のご自宅でのパーティーにご招待いただいた。イブラギモフ教授にはその後も何度も夕食をご馳走になり、また、アポイントに関する交渉や、移動に際しての自動車の運転など、多くの面でお世話になった。イブラギモフ教授にも心から感謝を申し上げたい。



デルベントの金曜モスク前の広場

マハチカラの市内はごくありふれた地方の中核都市といった風情で、正直なところ、それほど魅力のある街とは思えなかった。ただし、マハチカラでの滞在中は、毎日雪かみぞれ混じりの雨に見舞われ、徒歩での移動の際にはぬかるんだ道との闘いという状況だったため、私の印象がマイナス方向に補正されている面は否めない。天気の良い時期に、マハチカラの旧市街などをゆっくりと散策すれば、印象もまた異なるものになっただ

ろう。他方、イブラギモフ教授をはじめ、マハチカラの人々は人間的に非常に魅力的な方々ばかりで、また、いただいた食事どれも美味しいものだった。私には幸いなことに好き嫌いというものがあったくなく、どのような料理でも美味しく食べられる自信があるのだが、北カフカースの料理はまた格別だった。いただいた食事の多くが家庭料理だったこともあり、毎日食べても飽きることのない料理であると思った。

マハチカラ滞在中の後半、2月27日には、ダゲスタン共和国南部の都市デルベントに日帰りで行ってきた。デルベントには、ユネスコの世界遺産にも登録されている要塞の遺跡があるのだが、インドのデリー市内にあるレッド・フォートやクトゥブ・ミナールなどを見慣れた者にとっては、正直いまひとつと言わざるを得ないものだった。ただし、デルベントの要塞遺跡では、降り積もった雪をかき分け、寒さに凍えながらの見学だったため、こちらもやはり、私の印象がマイナス方向に補正されている面は否めない。他方で、デルベントの市内は異国情緒にあふれた素晴らしく魅力的な街であり、丸一日滞在しても飽きることはないだろうと思われた。当日は曇時々雨というあいにくの天気だったが、良く晴れた日であれば、町並みが太陽に照らされてさぞ美しいことだろうと思った。

デルベントでは金曜モスクのほか、ユダヤ教の会堂であるシナゴークも見学させていただ



デルベントのシナゴーク

いた。また、シナゴークではラビのご好意により、ユダヤ教のカシュルートに則った鶏肉の処理の過程を見学させていただいた。何かおどろおどろしい儀式を期待していたが、実際に連れていかれたのは、市内の食肉処理場兼販売所のようなところだった。生きた鶏を処理する一連の過程において、宗教的にもっとも重要と思われる作業はラビ本人が行っているようだったが、鶏の毛をむしるなどといった他の作業は食肉処理場の従業員に依頼しているようだった。従業員のおばさん達に迷惑がられ、おばさん達に気を使いながら鶏肉の処理を進めるラビの姿は、宗教指導者とは奉仕者なのだというのを強く印象付けるものだった。

ダゲスタン共和国は、ロシアの中でも特に民族構成が複雑な共和国であると言われる。ダゲスタンでは14の国家構成民族が定められており、中でも特に、北コーカサス語族であるアヴァル人やダルギ人、テュルク語族のクムク人などの比率が大きい（松里公孝「ダゲスタンのイスラーム：スーフィー教団間の多元主義的競争」前田弘毅編

著『多様性と可能性のコーカサス：民族紛争を超えて』北海道大学出版会、2009年、123-124頁）。

またダゲスタンでは、ロシアでは少数派であるイスラム教徒の人口が非常に多い。私がマハチカラで聞き取り調査を行った際の関心事項は、ダゲスタンにおける民族同士の関係は現在どのような状況になっているのか、民族のアイデンティティーとイスラム教徒としてのアイデンティティーはどのような関係にあるのか、イスラム教徒の人口比が極めて大きいダゲスタンにおいて、共和国政府とロシア連邦政府との関係、宗教指導者と連邦政府との関係などはどのようなになっているのか、などの点であった。

マハチカラでの聞き取り調査に際して強く印象に残ったのは、インタビューに応じてくれた研究者や政策関係者、宗教関係者のほとんどすべてが、ダゲスタンにおける宗教や社会をめぐる状況や、共和国政府とロシア連邦政府との関係などについて、いずれも「非常に良好」であると強調していたことだった。曰く、ダゲスタンの諸民族の関係は非常に良い。曰く、ダゲスタンのイスラム教徒は非常に穏健であり、一部の若者が急進主義に走っているに過ぎない。曰く、共和国政府と連邦政府との関係は非常に良好である。曰く、ロシア語はダゲスタンの諸民族を結びつける上で非常に重要な要素である。・・・などなど。このような内容は、宗教やカーストなどをめぐる暴力事件のニュースに日々接しているインド研究者にとっては驚くべきことであり、俄かには信じ難いものだった。



鶏肉の処理を進めるラビ

もっとも、ロシア語もできない外国人に対して、インタビューに応じてくれた関係者がどこまで本音を披露してくれたかは疑わしい。イブラギモフ教授と松里教授の雑談、インタビューに同席した方々の会話、パーティーでの参加者の歓談などの内容（それらはいずれも、松里教授による通訳と解説付きのものだったが）などから、ダゲスタンの諸民族同士の間には様々な確執があるのだろうということは容易に想像することができた。また、外部の者に対して、宗教や社会をめぐる状況が「良好」であると殊更に強調するということは、裏を返せば、そのような良好な状態を維持することが大きな課題だということに他ならない。民族同士の関係が本当に良好なものであるならば、細かい問題点などを指摘することが多くなり、話の内容はむしろネガティブなものになるだろうと想像されるからである。さらに、「優等生」的な回答をする可能性が高いと思われるエリート層ではなく、ダゲスタンの一般の人々にインタビューを行うことができれば、得られる印象は異なるものになっていたかもしれない。

出張日程の後半では、モスクワに1週間ほど（3月1日～6日）滞在し、同じように聞き取り調査を行った。松里教授はご都合により3月2日に一足早く帰国されたため、前述のとおり、残りの4日間は、ロシア科学アカデミー民族学研究所のナタリヤ・ゾトヴァさんに通訳兼コーディネーターをお願いした。ナタリヤさんは通訳およびコーディネーターとして非常に優秀だったほか、ご自身も北カフカース地方の民族問題に興味をお持ちだったため、聞き取り調査で得られた内容に関する補足説明や、私が十分に理解できなかった箇所についての解説などもしていただき、理解を深める上で非常に助かった。



ロシア科学アカデミー

雪と雨が続いたマハチカラが嘘のように、モスクワでは晴れの天気が続き、気温もそれほど低いものではなかったため、モスクワでの滞在は非常に快適だった。市内での移動には地下鉄を利用した。公共交通機関を用いてアポイント先に向かうことができる（すなわち、それほど公共交通機関が発達しており、また信頼性や安全性が高い）というのは、本来ならばそれが当然であるはずなのだが、インドでの調査の際にはもっぱら借り上げ車やタクシーを利用していただくとっては違和感を感じるほどに新鮮な体験だった。しかしその一方で、ロシアでは、移動にタクシーを使うことは金額的になかなか厳しいものようである。一度、アポイント先に遅刻しそうになったときに、通訳のナタリヤさんにタクシーを使うことを提案してみたが、そんな高いものに乗れるかと言わんばかりに却下された。街中の移動という点だけに限定すれば、気軽にタクシーを使えるインドのほうが楽なのかもしれない。

今回のモスクワ滞在において感銘を受けたのは、何といても、人々のマナーの良さである。建物の出入口や地下鉄の乗り降りなどでは、周囲の人々に対して配慮をするのが当然といった様子だった。初めてモスクワを訪れた外国人の目から見た、極めて限定的な印象ではあるが、物価の上昇など経済的に様々な問題を抱えていると言われる一方で、人々の行動ひとつひとつには何かしら余裕があるようにも思われた。インドは現在、ロシアと並ぶ新興経済国のひとつに数えられているが、このような「民度」という点では、インドがロシアに追い付くのは残念ながらもいぶん先のことになるだろうという気がした。

マハチカラでの聞き取り調査と同じく、モスクワでも、ダゲスタン共和国における民族同

士の関係、民族のアイデンティティーとイスラム教徒のアイデンティティー、共和国政府と連邦政府との関係、宗教指導者と連邦政府との関係、などについて聞き取りを行った。たいへん興味深かったのは、インタビューに応じてくれたほぼすべての研究者やジャーナリスト（ダゲスタン出身者も含む）が、ダゲスタンにおける宗教や社会をめぐる状況などについて、マハチカラで得られた回答とは正反対の評価を示したことである。ダゲスタンの諸民族の関係は必ずしも良好というわけではなく、有力な政治家や実業家などを中心に形成された主要民族ごとのグループが、互いに対抗する構図になっているようである。また、ダゲスタンにおけるイスラム過激主義の動きは非常に深刻なようであり、ジャーナリストの中には、イスラム過激主義の動向について極めて悲観的な見通しを示す者も見られた。

インド研究者としての経験から判断すれば、ダゲスタン共和国の状況については、モスクワでの聞き取り調査で得られた内容のほうがより信憑性が高そうである。いずれにしても、どちらの評価がより現実に近いものなのかという点については、今後の研究の中で詳しく検討していきたい。また、ダゲスタンの状況を部外者であるひとりの外国人（=私）に対して説明するときに、マハチカラとモスクワとでこれほど内容に違いが生じてしまう理由を探っていけば、ロシアにおけるマイノリティーの問題や中央-地方関係などを研究する上で、何らかのヒントが得られるのではないかと考えている。

他方、モスクワでの聞き取り調査において個人的に面白かったのは、「ロシア人（Russians）」という英語の単語をめぐるほんの些細なトラブルであった。インタビューに際して、私が「ロシア国籍を有している人々」という意味で、すなわち、ロシアという連邦国家に所属している国民全般という意味で「Russians」という単語を使ったのに対して、通訳のナタリヤさんの訳し方や、インタビュー相手の認識のしかたによって、先方には私が「ロシア民族」のことを言っているのだととらえられ、やり取りが噛み合わなくなることが何度かあった。「ロシア人」と「ロシア民族」は、ロシア語ではそれぞれ異なった単語になるようである。これはおそらくロシア研究者にとっては常識であろうし、ロシア語をまったく理解できない私が悪いのであるが、民族としてのアイデンティティーの根幹に関わるような単語が、ロシア語では明確に区別されているにもかかわらず英語では区別されないという事実は、なかなか興味深いことであると思った。

今回の聞き取り調査で得られた事柄については、北カフカース地方やダゲスタン共和国に関する既存の研究の内容なども合わせて、現在検討を行っている最中であり、調査結果についてはいずれ論文などの形でまとめたいと考えている。他方、今回のロシア出張の目的は、ロシアの北カフカースの事例とインドのカシミール地方や北東部諸州などの事例とを比較したい、という意図によるものであったが、約2週間（移動日を除けば実質約10日間）ほどの滞在で当初の目的がどれほど達成できたのか、正直なところあまり自信がない。このようなロシアとインドの比較研究が可能であるという手応えは掴んだので、可能であればもう一度ダゲスタン共和国に滞在し、じっくりと現地調査を行いたいと考えている。また、通訳を通して調査を行うにしても、ロシア語がまったくできないというのではお話にならないということも痛感したので、ロシア語の読み書きと会話が多少ともできるようになるべく、これから努力していきたい。

## 西ベンガルの地方都市にて

松里公孝（センター）

アエロフロートが東京モスクワ便上での個別ビデオサービスを止めてしまったのは、映画館に通う時間がないために機上での鑑賞で映画ファンとしての最低限の要求を満たしている身には本当に腹立たしい。同様のサービス低下はアメリカン・エアラインなど他の航空会社にも見られるので、コストの高いビデオサービスは止めるよう大手航空会社間で闇カルテルでも結んだのかもしれない。ただしアエロフロートの場合、東京モスクワ便に就航していた機体を中国便のそれと入れ替えたようだ（トイレの注意書きが簡体漢字である）。「東京モスクワ便はアエロフロートのドル箱」などと呼ばれて1日2便も飛んでいた時代もあったのに、日本の衰退、中国の台頭を象徴するような事態である。



ムルシダバードの駅前通り

映画なしで東京ーモスクワ、モスクワーデリーを飛び、いい加減退屈してコルカタに向かうためにキングフィッシャー航空の飛行機に座ると、なんとアエロフロートにはなくなった画面が前の座席の裏についている。いままで私は世界最高のキャビンアテンダントはアジアナ航空のそれだと思ってきたが、容姿だけとればキングフィッシャー航空も劣らないかもしれない。ただ、インドは女性が他人にサーヴする職業に就く習慣がない（その点ではムスリム諸国と同じである）うえに、カーストも上の方が人がリクルートされるのではないだろうか、人当りはあまりよくないように感じた。離陸する直前に、キングフィッシャー財閥オーナーのビジェイ・マリアが画面に出てアジるが、「キャビンアテンダントはすべて私が直接面接して選びました」などと言って胸を張っている。ビールで稼いだ金で航空業界に乗り込んだ気概を誇示しているわけだが、こういうセリフは欧米では問題になるかもしれない。いずれにせよ、インドの資本主義は、松下幸之助や本田宗一郎がまだごろごろいる段階なのだろう。

まる1日の空の旅を終え、3月9日朝8時半にコルカタに着いた。疲れすぎてホテルで横になる気がしないし、丁度、マウラナ・アブル・カラム・アザド記念アジア研究所の恒例の国際シンポが始まる日である。この研究所とSRCは親交が深く、一昨年には宇山氏と長縄氏が、昨年には私がこの国際シンポに招かれている。今年のテーマは、「インド近隣諸国の政治変動のダイナミクス」というもので、まさにタイムリーである。この研究所は私たちには縁遠い南アジア・東アジア・シベリアの人脈を持っており、アフガニスタン、ブータンからモルジブまで、欧米の学会では会えないような研究者の報告が聞ける稀な機会である。その直後に控えた、新学術「地域大国比較」の一環としての西ベンガル州ムルシダバード郡での調査の準備のため2日間フルに動かなければならず（官僚大国インドでは汽車の切符を買うためにも書類を埋めて提出しなければならず、大変である）、大半のセッション、特にアフガニスタンとパキスタンのセッションを欠席してしまったのが心残りであった。

3月10日の夜、いよいよ汽車でムルシダバードに向かう。今年の1月、黒龍江省のハルビ

ンからジャムスイまで汽車旅したときもそうだったが、普通の汽車の普通の車両に外国人が乗ると、大変な好奇の対象になる。ムルシダバード郡を調査対象に選んだのは、西ベンガル州の中でムスリム比率が最も高い郡だからである（62%）。ところが調査してみると、伝統的にワハビ派が強い郡であること、それにタブリグ（Tablig）というデリーを拠点とする新興イスラーム団体が挑戦している状況にあることがわかった。去年はコルカタ市とその郊外のみでムスリム宗務行政の調査を行ったが、やはり大都市の中だけでは何も見えないし、自分らしさが発揮できない。今年初めて郡部に出、また東大の田原史起氏と進めている地方自治の露中印比較のため、イスラームだけではなく世俗の地方行政も調査した。アジア研究所の短期フェローとして、研究所が車とガイドをつけてくれた昨年とは違い、今年はアポ取りも足の手配もすべて自分でやらなければならない。インドの地方都市内での移動は通常リキシャ（自転車タクシー）だが、隣町に遠征するとなると車が必要。地方には車のタクシーはほとんどないので、バスターミナルなどに行って車を持っている若者を捕まえて白タクをお願いしなければならない。英語がほとんど通じないので交渉は大変である。ただ、インドでは、路上で外国人が英語能力のない人と話が通じなくて困っていると、英語能力のある人がどこからともなく近付いてきて通訳してくれる社会慣習がある。これは大変ありがたい。

さて、夜中近くになってムルシダバードに着いたが、ホテルのフロントでムルシダバード郡の郡庁所在地がムルシダバードではなく2駅手前のバランポア（Berhampore）だということがわかってびっくりする。ムガル帝国時代の宮殿や巨大モスクがあることから郡の名前の起源とはなっているが、いまでは観光以外に取り柄のない小都市になり下がっているのである。翌日の調査はムルシダバードからバランポアに遠征、結局、その次の朝にバランポアのホテルに移った。しかし食事はムルシダバードのホテルの方がずっとよかった（骨付き羊肉カレーの味が忘れられない。最良の出汁は骨から出るようである）。ホテルの料金はムルシダバードで800ルピー、バランポアで1400ルピーであった（1ルピーは約2円）。インドでは外国人が泊まるようなホテルではなく、普通のホテルに泊まった方がいい。値段が10分の1くらいだし、床が大きな石のタイル張りで裸足になれるのも日本人にはありがたい。よくないことだが、過剰人口を吸収するかのように沢山いるベルボーイが八方から敏捷機敏に尽くしてくれるので、旦那になったようないい気分になる。話は先に飛ぶが、ムルシダバードでの調査を早めに切り上げてコルカタに戻ってきたとき、丁度、クリケットのワールドカップと重なっており、アジア研究所の尽力にもかかわらずリーズナブルな値段のホテルがとれなかった。仕方なく外国人用のホテルに泊まったが、チェックイン時に私は思わず声をあげそうになった。1泊分の値段が、ムルシダバードでの5日間の総宿泊費・食費よりも大きかったからである。何と歪んだ経済だろうか。

コルカタでは酒を買うのも飲むのも本当に大変だが、地方都市に行けばそんなことはない。レストランでビールを注文すれば、こっそり部屋に持ってきてくれる。伝票も切ってくれないので、非合法商売なのだろう。酒が自由に手に入るから褒めるわけではないが、インドは大都市よりも地方の方がずっといい。三輪博樹氏によればコルカタはインドの大都市の中でもずば抜けて汚いらしいが、歩道の半分を埋めて貧民窟があるのには閉口する。臭気がすごいし、また子供の顔は皮膚病でお化けのようである。地方都市に行けば、人々が単に貧しいだけで、貧民ではない。自分の家や店の前は掃き掃除するようなマナーも生きている。しかも田舎に行くほど、小都市になるほどモラルも健全で、たとえばムルシダバードの駅には乞食はいないが（外国人に興味をもったインテリ青年は話しかけてくる）、郡庁所在地のバランポアの駅になるとすでに乞食が寄ってくる。マハトマ・ガンディーがインド再生のカギは農村にあると考えたのが納得される。

ギュンター・グラスは「リキシャは21世紀の乗り物である」と言ったが、交通渋滞ゆえ

に時間の大半を車の中で過ごすコルカタでの調査に比べれば、リキシャを駆使した地方都市での調査は能率がいい。ただ、車のタクシーが安いのに比べれば、リキシャは割高な乗り物である。初乗りがインド人相手に15ルピー、外国人だと25ルピー請求される。せいぜい1-2キロしか走らないのだから、これは安い値段ではない。ムルシダバードから郡庁所在地のバランポアに移動したときにはベルボーイがホテルの4WD車で送ってくれた。また、バランポアからバングラデシュ国境沿いのまちラルゴラ (Lalgola) に行ったときも上述のように青年と交渉して乗せても



ラルゴラのナトゥン・ナルダハリ・モスクのイマムで同時にアル・マハドゥス・サラフィ・マドラサの教師モニルル・イスラム氏（向かって左側）と彼の同僚教師。宿舎はベッドが二つ並んでいるだけで質素である

らった。若い人たちは、ポンコツの国産車を運転する中年以上のタクシー運転手とは違った独特の運転をする。人ごみをのろろと抜けるときにパワーをため、前方に10-20メートルほどの空間ができると矢が弓から放たれるようにボンと加速するのである。これは絶対に人を引っ掛ける、接触事故を起こすとはらはらしながら私は座っていた。インドの汽車は扉が開けっ放しなので、そこから身を乗り出して景色を見ることができる。窓を通すよりもはるかに視界が広く、いろいろなことに気づく。まさに特等席といえる。

昨年と今年、2度の調査で痛感したのは、インドは現地語ができなければ研究できない国だということである。これは、北大公共政策の中島岳志氏がいつも力説することである。特にムスリム指導者はほとんど英語が話せない。西ベンガル州だけで8千万人人口があるのだから、ベンガル語を学ぶことは、エストニア語やラトヴィア語を学ぶよりかはるかに費用便益効果が大いはずである。生まれ変わってインド研究者になったら、現地語を勉強しようと思うのである。今回の経験で言うと、まずバランポアの商業区のモスクでインタビューしようとしたが、イマムも信徒も誰も英語が話せないということで、別のモスクに向かった。そのモスクはインテリ・中産階級街の中にあり、高齢の信徒のリーダーは、元外科医でイギリスに留学した経験もある人だった。ラッキーなことに、まさにこの人が、郡におけるタブリグ運動の創始者だった。このモスクでは若い信徒たちもみな英語が達者で、質問攻めに会った。ラルゴラに遠征したのは、バランポア駅のホームで偶然知り合ったばかりの友達がいたからである。この青年はミル・ムハンマド・アリという名で地元のインテリ家系の出であり、イスラーム学校（マドラサではない、世俗学校である）で数学を教えている。見事な英語で話し、インド訛りも強くない。彼が2人のイマムとの面談を組織してくれ、しかも通訳してくれた。2人のうち1人は、親譲りの高名なワハビのウラマーであり、非常にためになることを教えてもらった。こうして、バランポアとラルゴラでは幸運に助けられて何とか調査できたが、ムルシダバードでは全く駄目だった。「イマムがいる、働いているモスクに連れて行け」とリキシャに何度お願いしても、名所旧跡に連れて行かれるのである。

世俗政府の側も状況はあまり変わらない。インドの自治体は郡、ブロック、村の3層制なので、この3層のそれぞれに行って調査するのが望ましい。しかし、英語で自由に調査できるのは郡が限界である。郡とブロックの間にあるサブ・ディヴィジョン（これは自治体でなく、

国＝州の出先として郡とブロックを仲介する機関である)に行った時点で、長は英語で話すが、長から私の相手を託された代理(ナンバー2)はすでに会話が辛そうだった。ただしインドの役所は、横から覗く限りでは、書類は国家語であるはずのヒンディ語ではなくすべて英語である。つまり役人の受動英語能力はかなり高いはずで、日本人の英語能力と似たような状況といえる。この代理も、聞きやすくないが味のある言葉で話した(もちろん話の中身がいいからであるが)。選挙前で役人たちが忙しそうだったこともあるが、ブロック以下のレベルに行っても英語で調査することは難しいだろうと判断し、私は8日の予定だったムルシダバード郡での滞在を5日で切り上げた。



ムルシダバード郡自治体の建物

自治体があると権限・機能が錯綜して非効率になるとよく批判されるのだが、中国と同じく、人口が多すぎるので行政は多層化する傾向がある。西ベンガル州の人口8千万は普通のヨーロッパの国より大きいし、ムルシダバード郡の人口60万は鳥取県と同じくらいである。面白いことに、地方議会は自前の執行機関を持たず、国＝州政府の出先機関がそれを代行している。これは、ウクライナの郡(ライオン)自治と同じ構造である。旧ソ連圏の場合、こうした構造は上意下達しか生まないが、インドの場合、州の出先機関は地方議会の決定にきちんと従うようである。西ベンガル州では州政府は共産党だが、郡以下のレベルになると国民会議派や草の根会議派が握っている自治体があり、政治的に微妙な事態が生まれることは容易に推察される。しかし、1990年代の旧ソ連圏に見られたような権力分散や立法・執行権対立には向かないようである。

30年間共産党が支配してきた西ベンガル州ではこの3層パンチャヤート制の活動が活発で、所得の再分配がうまくいっていると言われる。10年前と比べて、乞食や不就学児童、病気になっても病院に行かない人の数が激減したと役人はみな自賛する。経済が成長しても、3層パンチャヤート制がうまく機能しないと富は一部の階層の手から流出しないとも言う。しかし、カリスマ的な婦人政治家であるママタ・バナジーをリーダーとする草の根会議派と国民会議派の攻勢によって、西ベンガルの共産党支配も終わりそうな気配である。中国のエリートが、ソ連時代の惰性でいまだにロシアを「兄貴分の国」とみなす傾向があるのにも驚くが、インドはかつて親ソの国ただただあって、リベラルの共産党批判も面白い。「レーニン(ソ連共産党?)は革命後20年で非識字者を絶滅した、我々の共産党は30年も政権をとっているのにまだ大量の非識字者がいる」と言って批判するのである。なお、インド人は銅像を建てるのが好きだが、郡庁所在地であるバランポアは本当に銅像が多い。その中には、もちろんレーニンの銅像もある。

インドの地方自治制度は3層パンチャヤート制と呼ばれる。パンチはサンスクリット語で5を意味する。言うまでもなくロシア語のピャーチ、リトアニア語のペンキ(これも5を意味する)の源で、さらにはフルーツパンチやボン酢の語源であることは『美味しんぼ』に描かれたとおりである。パンチャヤートは「5人委員会」とでも訳すべきで、リグヴェーダの時代に村の寡頭指導者が上位権力からは自立して村の行政を取り仕切っていたことに端を発している。3層も自

実際、昔の擬似社会主義政策の名残か、エリートが大量に留学していたせいか、インドには、官僚主義と煩雑な手続き、小額紙幣の絶望的不足、研究協力者のプライドが高くてお金を受け取ろうとしないこと（携帯電話での通話など実費支出させているのだから、これは本当に困る）など、かつてのソ連を髣髴とさせる現象が多い。その意味ではシリアにも似ているが、シリアと違い、拷問の方法はソ連から学ばなかったようである。

貧しい階層に多いムスリムは、伝統的に共産党の票田であった（こんにちでは、草の根会議派がムスリム指導者を猛烈に切り崩している）。他州に比べれば西ベンガルではムスリムは優遇され、ヒンドゥ教徒との流血の抗争も起きていない。しかし、上述のミル・ムハンマドと話す、ムスリム・マイノリティの目には自称世俗国家インドはこう映るのかと考えさせられる。事実のほどは知らないが、たとえばインドの周辺小国国民のうち、ヒンドゥ教徒であるネパール人だけがインド軍に勤務することができ、またインドでの不動産取得に制限がないそうである。このような特権は、宗教を異にするブータン人、バングラディッシュ人、スリランカ人は享受していない。ムルシダバード郡でしばしば問題になるのは、ムスリムによるバングラディッシュへの牛の密輸である。バングラディッシュに運んでしまえば牛は食肉にしか過ぎない。インドでは、もちろんそうではない。国境警備兵が牛密輸業者をしばしば射殺してしまうのである。

なりふり構わず生きることに必死という人々の有様においては、インドは中国に似ている。コルカタの空港から研究所があるソルトレイクまでタクシーに乗って周りの喧騒を眺めているだけで、しだいに自分にパワーが注入されるような感じがする。変に成熟してしまい、はすに構えたロシア人とは違う。その反面、かつて日本やソ連で人々を惹き付け、こんにち中国人を惹き付けている近代化、文明、衛生、国民教育などの価値体系がインドでは全く説得力を持たないことに驚かされる。かつて書いたが、中国の公衆トイレの小便器の一つ一つに「便器への一步は小さいが、文明への偉大な一步である」という標語が張られているようなことは、インド人の理解を超えるだろう。相当りベラルなインテリでも「カースト制は社会の潤滑油として有益である」と内心思っていることは、たいして注意しなくても気づく。こうしてインドは進化を拒否するが、富国強兵していることは事実である。近代化なき富国強兵という前例のない実験が十億人規模で展開されているのである。

## ロシア研究者のデリー滞在よもやま話

大串 敦（大阪経済法科大学）

2011年3月11日から21日まで、新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」の一環としてインドの首都デリーに滞在してきた。ご同行くださったのは、上智大学の安達祐子さんと関西学院大学の三宅康之さんである（現地のホテルで偶然にもスラ研ではおなじみの伊藤庄一さんとお目にかかった。ロシアで会うならなんとなくわかるが、インドで会うとはなんと偶然であろう）。安達さんと私はユーラシア地域大国の支配政党（優越政党、dominant party）の比較研究をするつもりで、かつて支配政党だった国民会議派の支配維持システムや後にその地位を維持できなくなった原因などを調査しに行った。そこで得た学問的な知見に関しては、私と安達さんは11月にワシントンDCで行われるスラブ東欧ユーラシア研究学会（ASEEES、AAASSから最近改称）にて報告する予定であるので、今回はそこからぼれ落ちるよもやま話を書いて、お茶を濁すことにしたい。

非先進国を研究する地域研究者の多くは、現地調査というものはなかなか当初の予定通り

進まないものだ、ということに同意していただけるものと思う。周到に準備をしていたつもりでも、予期せぬトラブルに見舞われることもある。腹を立てたり、困惑したり。それでも、そうした経験を積み重ねて、研究者は徐々に地域になじんでいく。

さて、今回の私たちの調査旅行では、最初のトラブルは実は出発以前に生じていた。現地での諸々の調整をお願いするつもりでいた三輪博樹さんに、諸般の事情によりご同行していただくことが不可能になってしまった。完全にインド初心者の我々三人組は、出発前に、さてどうしようという感じになってしまった。三輪さんに甘えて油断していたのが悪いのであるが、これでは現地になじむとかそんなこと以前の話である。こうして、私たちの調査は調査をする以前から暗雲が立ち込め始めたのであった。

それでも、長い民主制の歴史ゆえだろうか、インドという国はロシアと違って表面的な厳格さは比較的少なく、あの印象的な緩さゆえなんとか調査も可能になった。私と安達さんが与党会議派と最大野党の BJP という政党にアポなしで直接訪問した際、これといったセキュリティチェックもなく、ろくなパスポートの確認もなく、用件を言うだけであっさりと中に入れてくれた。ロシアのあの厳格なチェック体制に辟易した経験を持っている人間からすれば、これはちょっとした驚きだった。インドで一番セキュリティチェックが厳しかったのは、国会の敷地内にある議会博物館に物見遊山に行ったときであった。もっとも、インドでは政党政治が政治システム上最重要なものの一つであり、多くの一般人と見受けられる人が陳情らしきことをしに訪れているので、厳格なセキュリティチェックなどして人を遠ざけるのはよくない、という判断が働いているのかもしれない。

もちろん、入れたからといってその党の高位の人物から面白い話を聞けるとは限らない。私たちが訪れた時は国会が会期中で、高位の人は多忙であるようだった。与党会議派で話を聞いたバカボンのパパにちょっと似ているおじさんは、「よしよしおれが答えてやろう」と言わんがばかりの態度で、彼にかかってきているのであろう電話に返事することなく即座に切りながら、びっくりするくらい内容のない話をしてくれた（これはこれですごく面白かったのだけだ）。しかし、これには当然ながら私たちの責任もある。言うまでもなく現地語の問題で、先程から、「見受けられる」とか「らしき」とか書いていて我ながら情けないのであるが、ヒンドゥー語ができないから本当のところは何なのか分からず、このように書くしかないのである。バカボンのパパに似たおじさんにも、ヒンドゥー語であればもっと内容のある話を聞くことができたのかもしれない。次にインドに行く機会があれば、少しだけでもヒンドゥー語を勉強してから行こうと思った次第である。ちなみに、会議派でも BJP でも若くていい教育を受けていそうな人が、かなりきれいな英語を話していた。

現在、インドでは数多くの地方政党があり、州レベルではもちろん全国レベルでもそれらの動向は無視できない要素になっている。そのような状況で、現地語ができない私が二つばかりの全国政党をちらっと訪れただけの印象で即断するのは全く危険だし、一般的に言うとどちらの党も多くの人々は外国からの訪問者に親切であったが、どちらかというと BJP のほうが訪問者への対応などがしっかりしていたように思われた。そこで会ったお兄さん（やや薄くなり始めたご本人の頭髪を気にしているのか、私たちに日本人の髪に毛についてしきりに質問してきた。仕方がないので、日本人は海藻を食べるからとかいい加減な返事しておいた）は、担当者と連絡を取ろうとかなり誠実な努力をしてくれた。

インドは図書館が素晴らしいのでそこで調査するのも有益である、と以前松里先生から伺ったことがある。私たちが訪れたネルー記念博物館・図書館（要紹介状）では、図書が基本的にはすべて開架で、細かいパンフレットの類まで整理されていた。まだ私の研究が細かい一次資料に突入する以前の段階であるため、十分活用できなかったことが惜しまれるが、今後の調査の際に必要な文献・一次資料の目途を立てることができた。国立公文書館には、省庁

の公文書がそろっている（要紹介状）。ただし政党関連のものはほとんどない。国家と政党の区別は文書管理に関する限りではかなり厳格であるように見えた。また、とりあえず行ってみようと言いながら行ってみた中央選挙管理委員会の建物にも独自の図書室があり、紹介状があれば利用できる。こちらもかなり貴重な資料がそろっていたが、資料はほとんど全て分厚いほこりをかぶり、保存状態が悪く痛んでいるものが多かったのが残念であった。安達さんはここで



研究者御用達の書店通り

写真入りのヨガの教本を発見し（なぜ中央選管の図書室にヨガの本があるのかは不明である）、興味深げに眺めていた。きっと帰国後の現在、ヨガに目覚めてらっしゃるに違いない。それはともかく、研究者御用達の書店はもとより、比較的普通の書店に行ってもかなり広いスペースが政治関係の書物にあてがわれており、選挙などはとても好まれるテーマであるかに見えた。私が手掛けているような政党政治に関しては、資料自体は豊富に存在しており文献調査だけでもかなりのことができそうである。



よく手入れされた公園

デリーの街で印象に残ったのは、恐ろしく激しいコントラストである。ヨーロッパの中心部にあっても恥ずかしくない立派で近代的なショッピングモールのすぐ隣には、比類なくすさまじいと思えるようなスラムがある。街のどこにでも物乞いがいるかと思えば、かなり良く整備されたきれいな公園があり、人々は楽しそうに散歩したり、横になりながらトランプに興じたりしていた（その公園の一つ、ネルー公園にはなぜかレーニン像が建っていた。疑似社会主義政策時代

に建てたのだろうか。由来を調べようと思いつつ調べないまま現在にいたっている。誰か知っている人はこっそり教えてください。場所によっては臭気も強烈であった。ただ単に汚物でくさいというだけではなく、それと食べ物と香水などが混ざった、何ともいえない臭気があちこちに立ち込めていた。ちょっと郊外の道路では新しい車がそれなりのスピードを出している横で馬車がのんびりと動いている。近代化後発国ではこうしたコントラストが激しくなる傾向があるが、インドのそれは他の国と比べても群を抜いているのではないだろうか。三輪さんのアドバイスもあり、今回私たちはタクシーを借り上げ、移動はもっぱらそれに頼ることになったのだが、公共交通機関を使ったらきっともっとこうした激しいコントラストを体験することになったであろう。

タクシーを借り上げ、と書いた。ロシア研究者は、公共交通機関、地下鉄やマルシルート力を使うのが当たり前である（とりわけモスクワやペテルブルグのような大都市では）。モスクワでは車に乗ってしまったら、渋滞に巻き込まれ、地下鉄ならほんの10分程度のところに1時間近くかかったりするリスクがある。荷物が重たい空港からの移動でタクシーを使うこともある程度である。調査旅行でタクシーを使いまくるといった贅沢な経験は、今回が初めてのことであった。これは想像以上に楽であった。ただそれでもちょっとした後ろめたさがあったのも事実である。庶民の足をまるで体験しないのは地域研究者として失格であるような気がした。インドになじもうにも、私とインドの間には車の窓ガラスという壁が存在していた。とはいえ、実際のところ、三人であちこち移動するとなるとリキシャでは手狭だし、たびたびの移動となるとタクシーを借り上げても料金的にも大きな違いがないのかもしれない。またいろいろな話を総合するとインドの公共交通機関は治安も良いとは言えず、安定性にもいろいろ問題があるそうである。事実、タクシーが信号で止まっていると、実に多くの物乞いがかなり激しい勢いで窓ガラスをたたき、金銭を要求する。車の窓ガラスという壁は安全もまた確保してくれていたのかもしれない。

そして、食事に関して。インドで食あたりはしたくなかったのも、私たちはかなり慎重にレストランを選んだ。三宅さんはお食事係として活躍してくださった。ちゃんとしたレストランで食べたインド料理は申し分なくおいしいものであった。ただ、本場インドカレーのようなこってりとしてスパイスの効いたものを毎日食べるというのは、私としてはなかなかつらいものがある。数日経つと、もっとあっさりしたものが食べたくなったりもした。徐々に意志も弱くなりイタリアンや日本食レストランにも行った。インド研究者の皆さんは一体どうされているのだろうか、とふと疑問に思った。やはり時々趣向を変えて、日本料理屋さんに行ったりするのだろうか。それともああいいうインド料理をがつつり食べることでインドを口からも知るのであろうか。

最初に書いたが、私と安達さんが出発したのはあの3月11日であった。成田離陸の数時間後、大地震が発生した。あと数時間離陸が遅れていたら我々は成田で身動きができなくなっていただろう。この偶然は私にはどことなく象徴的に感じられた。トラブルらしいトラブルといえば、インドのトランスパレンシー・インターナショナルが会議を企画していて、私たちも参加するつもりでいたのが、直前になって会議自体がキャンセルされたことと、安達さんが現地の携帯電話をを買うのにちょっとした面倒があったぐらいだった。もっと大きなトラブルで調査がうまくいなくなる可能性は多分にあったのに、インド初体験としては比較的円滑に調査らしきこともすることができた。逆に言うとインドになじむところまではまだまだほど遠い、ということだろう。

## 学 界 短 信

### ◆ 国際・政治学会 (IPSA) と欧州政治研究コンソーシアム (ECPR) ◆ の合同コンフェレンス

2006年に福岡で世界大会をやったこともあり、日本人の政治学者でIPSAを知らない人はいないだろうが、欧州政治研究コンソーシアム (ECPR) の方は耳慣れない団体ではないだろうか。私も、すぐれた政治学雑誌である *European Journal of Political Research* を刊行している団体といった程度の認識しかなかった。聞くとところによれば、IPSAがASEEESなどと同

様、個人加盟制の団体なのに対し、ECPRは政治学の研究機関で構成する団体らしい（その点では中国のスラブ学会と同じである）。「ヨーロッパ」とはあくまで団体発祥の地を表す形容詞で、いまでは非欧州の研究機関も加盟しているようだ。

この2月16～19日、ブラジルのサンパウロ大学において両団体が初めて合同で国際学会を開いた。ブラジルの土地柄を反映して、全体のテーマは、「南北関係に何が起きているのか」というものだった。

このくらいのステータスの学会が南米で開催されること自体が珍しいことなので、ブラジルの同僚の張り切りようは微笑ましい位だった。東アジアから参加するためには北米乗り換えで丸1日飛ばなければならぬが、ヨーロッパ人にとってはブラジルはリスボン経由で行けるので学会開催地としては不便ではない。ペーパー数はよくわからなかったが、多分400～500本、ASNの半分程度の規模だっただろう。

福岡の世界大会でさえ出なかった私だから、通常であればこのような学会が開かれることさえ知らずに終わっただろう。ところが昨年の初夏にロシアの政治学者のミハイル・イリインが、同じく政治学者である奥さんと一緒に「不利な条件下での民主主義建設」というコンセプトでサンパウロでパネルを組織しようと声をかけてきたので、二つ返事でOKした。南半球に行くことなどこれが最初で最後だろうし、BRICsの一角であるブラジルは、露中印を比較する新学術研究の成果を発表するのにふさわしい場所だと思われた。ブラジルを見ること自体が露中印を考察する上でも役に立つかもしれない。イリイン夫妻は頑張って声をかけて、当初はユーラシア対象と非ユーラシア対象で2パネル組織する予定だったが、イリイン夫妻自身が参加を断念するというよくある展開で、1パネル、4報告に縮小した。

初めての合同学会であり、今後継続する試みかどうかもわからないらしいが、その組織方法が変わっていたので記しておきたい。まず組織委員会が、「国際関係の変化するパターン」、「政治体制、民主制の定着と質」、「経済趨勢と政治・社会・文化変動」というテーマ別に3部門に分かれており、この部門が主導的な役割を果たす。通常の国際学会では組織委員会はプロポーザルを査読し、一定の水準があれば通すだけだが、この部門指導者は、もっと差し出がましいこともやったようだ。事前に提出されたペーパーはホームページから汲み出せる仕組みになっていたため、それは有難かった。

サンパウロ大学の立地は悪すぎる。物価が安いブラジルで、市の中心からタクシーで4千円くらいかかるし、地下鉄で一番近い駅に行ってからタクシーに乗り継ぐと通勤に2時間近くかかる。しかも最寄の駅からもかなり遠いので、お金もあまり節約できない。タクシーがラッシュに当たると目も当てられない。メーターだけが上がり、30分間で数百メートルしか進まない。組織委員会指定のホテルに住んでいればバスの送り迎えがあったようだが、それも毎日1500円くらい取られる。2015年に世界大会を開催する立場から見れば、「こんな立地条件でよく国際学会など呼んだな」と呆れる。

アメリカの学会に慣れた身には、プログラムはおそろしく緩く感じる。4日間の学会だったが、毎日午後3時40分にはパネルが終わる。その後、午後7時に組織委員会が提供する大



サンパウロの日本人街

企画があるのだが、その間3時間以上はぼっかり時間が空いてしまう。大学の周りは産業団地で何もないし、市街までもどってしまえばもう夜の企画に出るのは無理である。

*European Journal of Political Research* という雑誌もそうだが、政治制度論にすぐれた発表が多かったように思われる。私の知り合いの中では、準大統領制研究の第一人者であるロバート・エルジーが組織委員の一人だったので、準大統領制研究が盛んな台湾から中央研究院の呉玉山をはじめ沢山研究者が参加していた。私は昨年(2010)の11月に台湾の国立政治大学と中央研究院で報告したばかりなので、なんだかストーリーがつながっているような気がする。そのほか日本人にも馴染みの顔といえば、1990年代の前半に東大で就職浪人をしていたウクライナ人のミハイル・モルチャノフ(いまはカナダで教えている)、SRCの国際シンポに参加したエストニアのエイキ・ベルグ、ドイツ在住のオレフ・プロツィクくらいであろうか。どういふわけか、西欧や米国の研究がほとんどなく、東欧、南米、アフリカ、トルコ、インドなどに関するペーパーが大半だったので、政治学ではなく地域研究の学会に出ているような感じがした。



サンパウロの旧市街

私自身は、「競争的権威主義体制とその奇妙な代替物：ロシアと中国」という題で、あまり実証的でない話をした。新学術では経済班が「再版ブレトン・ウッズ体制」のような大きな議論をしているので、政治学でもそれに対抗しなければならないと考えたからである。幸い、イタリアの *il Mulino* という雑誌に短縮版を発表するよう声をかけられた。また、前々からロシアの同僚にはロシア政治学会長のオクサナ・ガマンーゴルトヴィナ(MGIMO)に会うよう言われてい

たが、今回会場でようやく会うことができた。彼女からは、ペーパーの完全版の方を彼女が企画中の論文集に寄稿するよう誘われた。

サンパウロは近代的なまちで、観光都市としてはリオデジャネイロよりも劣らしい。ダゲスタンでの調査のために学会の最終日の夜には、そのサンパウロを発たなければならなかった。まち自体は、日本人街でラーメンを食べ、旧市街を歩いた以外は何も見るできなかった。レヴィ・ストロースが『悲しき熱帯』の中で「南米ではあらゆるものが巨大で、あらゆるものが急速に劣化する」といったようなことを書いていたように記憶するが、私が旧市街で受けた印象はまさにこれであった。イスタンブル、上海、北京、コルカタ、テヘランなどの世界の新興大都市に共通することだが、経済の成長に都市のインフラがまったく追いついていない。それは絶望的な交通渋滞や空港入管前の長蛇の列に現れる。このうち北京と上海だけは、数年前と比べれば交通事情が明らかに良くなり、経済実態にインフラを追いつかせる強い国家の意思を感じるが、その他の国はあまり目的意識的ではないようだ。

非常に嬉しい邂逅だったが、サンパウロ大学を初めとしてブラジルには数名のロシア研究者がいるようである。イリインが欠席してしまったので、私たちのパネルの組織者をやってくれたのは、サンパウロ大学のアンジェロ・セグリロという、ソ連政治史を専門とする若い長身の教授であった(ブラジルのロシア学者など珍しいと思うので、彼の講義が聞きたけれ

ば次にアクセスされたい <http://www.youtube.com/watch?v=7W8m9ChOOaI>。1990年代にロシアから移住してきた研究者が中核となり、いまロシア語を読める研究者が育っている段階だそうだ。[松里]

### ◆ 民族研究協会 (ASN) の年次大会に参加して ◆

去る4月14～16日、ニューヨークのコロンビア大学で開催された民族研究協会 (Association for the Study of Nationalities) の年次大会で5年ぶりに報告してきた。この学会は地域・争点の双方においてマイナー志向・先端志向が強く、その意味で ASEES よりも日本の研究者向けだと思われるのだが、どういうわけか日本の研究者で大会に出る人が少ないので (今年も日本人は私一人だった)、参加促進の意味も兼ねて、ここで紹介したい。

田舎回りをする ASEES の大会と違って、ASN 大会の開催地は毎年コロンビア大学に固定されている。毎晩7時過ぎまでコロンビア大学で缶詰にされても、8時のブロードウェイの開演に十分間に合うので、ミュージカル・ファンには夢のような数日間がおくれる。ペーパー数は約700本で、ASEESの半分くらいである。そのため期間も3日間で、セッションあたりのパネル数も少ない。特徴的なのは、ASEESよりも個人プロポーザルを気軽に受け付け、パネルに配置することである。つまり組織委員会の権限が ASEES より大きいと考えられる。このあたりも日本人向けであり、私も昔から ASN には個人で参加してきた。ただし、ペーパー配分の結果か4人パネルが多いので、報告時間は20分ではなく15分である。

ASN が1996年に大会を開催し始めたときには、AAASS (現 ASEES) を喰ってやるという野心が露骨であった。また、ソ連解体の余波から、それだけ多くの研究者が民族問題に関心があり、ロシア語以外の言語を学んでいた。しかし、ほどなくして中央ユーラシア研究協会 (CESS) が分離独立したことは ASN のプロフィールからして大打撃であり、こんにちでは自らのニッシャーにおさまったことで ASEES との棲み分けはうまくいっている。コーカサス、旧ユーゴスラヴィアなど民族混住地域や紛争に関するペーパーが多いことが特徴である。経済のペーパーが少ないのは ASEES も同じだが、それに加えて歴史のペーパーも少ない。民族史や帝国論のブームを考えると後者は不思議だが、特に最近の傾向である。

今年の大会ではアブハジアに関するパネルが非常に多く、ほとんど各セッションごとにあった。しかもそれらパネルで必ずといっていいほどメグレリ人問題が議論になった。これは、昨年から今年にかけて、Tom Trier, Hedvig Lohm, and David Szakonyi, *Under Siege: Inter-ethnic Relations in Abkhazia* (London, Hurst & Company, 2010) と John O'Loughlin, Vladimir Kolossov and Gerard Toal, "Inside Abkhazia: Survey of Attitude in a De Facto State," *Post-Soviet Affairs* 27:1 (2011), pp. 1-36. というアブハジアのマイノリティに関する優れた集団研究の成果が発表されたからである。これらのプロジェクト・メンバーは、アブハジア人も含めて当然参加していたが、率直に言って英語が聞き取りにくい人もいた。しかし、聴衆の質問はアブハジア人に集中し、また辛抱強く聞いていた。「両方の言い分を聞いてみなければならない」などということは日本における非承認国家研究では以前から当たり前のことで、非承認国家から来たというだけで有難がられるようなことは日本ではないから、その点では日本の非承認国家研究の方がずっと進んでいる。しかし、中立的な研究の必要性が認識されるや否や、膨大な資金を投入して上記のような優れた成果をあっという間に発表してしまうのだから、やはり北米にはかなわない。

私自身は、「信仰か、伝統か：アルメニア使徒教会とアルメニア、カラバフにおけるコミュニティ建設」という題で報告した。私以外の報告者は皆アルメニア人だったが、聴衆の中にはアゼルバイジャン人が多く、感情を抑えた学問的な討議になった。カラバフで調査する限

りでは、もう一度戦争をしない限り双方納まらないように思われるのだが、それ以外のシナリオも、僅かな可能性ながらあるのかなと感じた次第である。[松里]

### ◆ 学会カレンダー ◆

- 2011年6月4-5日 比較経済体制学会全国大会 於東北大学  
 7月7-8日 新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」第5回国際シンポジウム 於北海道大学  
 10月8-9日 日本ロシア文学会大会 於慶応義塾大学日吉キャンパス  
 11月11-14日 スラヴ言語学国際会議「スラヴ諸語における文法化と語彙化」 於北海道大学  
 11月17-20日 ASEES (スラブ・東欧・ユーラシア学会) 年次大会 於ワシントンDC
- センターのホームページ(裏表紙参照)にはこの他にも多くの海外情報が掲載されています。[大須賀]

## 大学院だより

### ◆ 修了者・新入生・在籍者 ◆

2010年度、大学院文学研究科スラブ社会文化論専修では、4人が博士課程を単位修得退学し、4人が修士課程を修了しました。また、前年度に博士課程を単位修得退学した麻田雅文さんが、論文「中東鉄道経営史：ロシアと「満洲」、1896-1935年」を提出し、博士号を取得しました。皆さんの諸方面での活躍をお祈りしています。麻田さんと修士課程修了の宮風さんが、下記のように修了者の声を寄せてくれましたので、お読みください。

4月には、修士課程3名、博士課程1名(内部進学)の新入生を迎えました。今年度の大学院生およびスラブ研究センター研究生は以下の皆さんです。[宇山]

学年	氏名	研究題目	指導教員(正・副)
D3	須田 将	スターリン期ウズベキスタンにおけるソヴィエト市民の創出	宇山 岩下
D3	立花 優	アゼルバイジャン現代政治	宇山 松里
D3	井上岳彦	帝政ロシアとカルムイク人	宇山 長縄
D3	櫻間 瑛	ロシア連邦沿ヴォルガ地域における宗教 = 民族関係	宇山 松里
D3	マルティン・ホシェク	極東におけるチェコスロヴァキア軍団 (1918-1920年)	ウルフ 松里
D3	竹村寧乃	ソ連初期ザカフカス連邦	宇山 長縄
D3	秋月準也	ミハイル・ブルガーコフと20世紀初頭のロシア文学	望月 野町
D3	アレクサンドラ・クリャクヴィナ	有島武郎の「或る女」とトルストイの「アンナ・カレーニナ」における女の運命	望月 野町
D2	斎藤祥平	言語学者 N. S. トルバツコイとユーラシア主義	ウルフ 望月
D2	松下隆志	ゼロ年代以降のロシアにおけるポスト・ポストモダンニズム文学	望月 野町
D2	中野哲平	コーカサスのトルコ系ムスリム知識人の政治思想とその運動	長縄 宇山
D1	ハン・ボリ (韓寶麗)	中央アジア高麗人社会の「改宗と伝統」問題	宇山 長縄
M2	石黒太祐	チェコスロヴァキア「正常化」体制のイデオロギーと政策	家田 松里
M2	マリヤ・アルチュシキナ	東シベリア・極東地域と北東アジア諸国のエネルギー協力におけるサハ共和国の役割	田畑 山村
M2	塚田 愛	ウズベキスタンからロシアへの出稼ぎ労働者問題	宇山 山村
M2	長友謙治	世界の農産物市場におけるロシアの役割	山村 田畑
M2	アセリ・ピタバロヴァ	カザフスタンおよびタジキスタンにおける中国に対する認識	岩下 宇山
M2	恩田良平	CISにおける経済的地域主義と関税同盟	宇山 岩下

M2	西原周子	ヴーク・カラジッチとセルビア標準語	野町	望月
M2	野口健太	ロシア経済における資源エネルギー問題	田畑	山村
M2	エレナ・ゴル ブノワ	ロシア極東地域の発展における中央政府の役割	田畑	山村
M1	高良憲松	チェコとスロヴァキアの「正常化」の記憶とイメージ	家田	野町
M1	中野 智	中央アジアの現代政治・国際関係（クルグズ共和国を中心として）	宇山	岩下
M1	山崎龍典	ソ連に於ける任意スポーツ団体	松里	田畑
研究生	エカテリーナ・ ブリーク	日本とサハリン州の都市間交流の歴史		岩下
研究生	アントン・マト ヴェエフ	サハリンの農業と日露農業交流（1980年代後半より）		山村

## 北大辞去

### 麻田雅文（日本学術振興会特別研究員／首都大学東京）

スラブ社会文化論専修に入学したのは、イラク戦争もたけなわの2003年4月であった。札幌でバグダッド陥落のニュースを見たのを、つい先日のように思い出す。それから7年かけて私は博士課程を終え、博士論文の執筆のために無理を言って居させてもらい、ようやく2011年2月に札幌を後にした。世界や日本の状況はその間にすっかり様変わりしたが、スラブ研究センターの院生室には、常に研究を価値あるものと信じる若人がやって来ては去って行った。私もその一人である。

こうして書きつけてみれば長い年月のようでもあり、思い返してみれば短い年月のようにも感じる。どちらも感じ方の問題であることからしてみれば、また年月を経た時には、また違う感じ方をするのだろうと思う。それでもあえていま、北大時代とは何だったのか振り返ってみれば、ひたすら学問に打ち込んだ時代と言えるだろう。ここに来なければ、中東鉄道というテーマで博士論文を仕上げることはまず不可能だった。指導教官として未熟な私を導いてくださった原暉之教授、デヴィッド・ウルフ教授には感謝するばかりである。また副指導教官として、様々なチャンスを与えて下さった松里公孝先生には、その信頼に依っていたか不安はあるものの、学者としての跳躍台を用意して頂いたことにお礼の言葉もない。その他にも、私の院生生活を様々な形で支えて下さった図書室や事務室の皆様へ心より御礼申し上げたい。北大で頂いた博士号や修士号は学問、そして人生の一里塚に過ぎない。この先、北大で打ち込んだ学問を花開かせるよう、怠らずに研鑽に努めたい。

ところで、当のスラブ研究センターではグローバル COE や新学術領域などの大型プロジェクトも終わりに近付いている。国外にアピールする力も大切だが、余裕のなくなりつつある国民の税金で支えられていることを思えば、国内に向けて発信する力と説得力もますます求められるだろう。古巣の「スラ研」は様々な意味で岐路に立っているが、後に続く院生の皆さんにはそうした状況に翻弄されずに、入学当初の初心に立ち、しっかりと学問をしてもらいたい。そのために十分な環境は整えられ、欲する者には様々な便宜が図られるのだから。一方で、そうした贅沢な環境に安住しがちなのも知っている私としては、積極的に院生室の外へ飛び出し、学会や社会で広く活躍して欲しいと願うのが、私の辞去の挨拶である。

## 夢の2年間

宮風耕治（大阪労働局）

あっという間の2年間でしたが、私自身は本当に充実した時間を過ごしました。2年前、胸を高鳴らせて修士課程に進んだ時のことを思い出します。9年間勤めた職場の理解を得て、幸いにも、2年間休職という形で大学院に入りました。2年後は復職できるということもあり、勉強と研究に集中することができました。就職活動も長期化する中、修士課程修了後に就職を目指す学生たちは、研究の面においても、将来の見通しという面でも、今はたいへんな苦勞をされていると思います。同時に、大学院で勉強された方々は私にとっては非常に憧れの存在であったわけで、遅まきながらそうした人の中に加われるということは、興奮すると同時に不安でもありました。

ともかく、修士課程の2年間でこういうことをやりたいという目標というか、願望のリストのようなものを、除夜の鐘が表す煩惱のごとく書き出し、大学院生活に臨みました。毎日やること、今週やること、一ヶ月以内にやること、そうしたものを書いている時は楽しいのですが、いざやり出すと飛ぶように時間が過ぎ去ってしまい、今日の目標が全然達成できていないと、夜の11時頃になって焦り出すこともしばしばありました。

修士課程での時間の過ごし方については、1年次に修了に必要な単位をおおむね取ってしまい、2年次は修士論文を書くことに時間を当てるというのが、普通のやり方だと思います。大学院の授業は演習が中心なので、少人数の濃密な授業が続くわけですが、少人数とは言え、さまざまな分野に専門的な関心や知識を持つ人たちが集まっているので、自分では気づかないようなものの見方や情報をたくさん知ることができました。私が受講した演習や講義はどれも知識を詰め込んだりするようなものではなかったのですが、左官屋が何度も塗り重ねて壁を仕上げていくように、自分の頭の中もペタペタと仕上げられていくのを感じました。これは非常にありがたいことでした。

修士論文については、現代ロシアのSF文学をテーマにすることは決めていたのですが、具体的に誰を取り上げるかということは入学時には決めていませんでした。ところが、先行研究が少ない分野なので、とにかく実際の作品をたくさん読み進めないと、論じる対象の全体像がどのようなものなのか自信が持てず、1年目はロシアのSF史上で重要と思われる作品をひたすら読みまくることに決めました。しかし、600ページを超えるような長編を何十冊も読むことなどできるはずもなく、ヒトデ人間とイカが対決する話が果たして自分の修士論文に関わってくるのだろうかとか疑問を抱くようになり、論文は論文としてきっちりと論点と構成を考えなくては、このままでは間に合わない気がついたときには、入学後1年を過ぎていました。

具体的に取り上げる作家を決めたのはその頃ですが、あまり作品数の多い作家ではなかったので、とにかく主要作品は全部読んでしまおうと、若干引きこもりがちになりながらも作品を読み進め、夏頃までにだいたい読み終えました。スラブ研究センターには、毎学期に一度は、院生全体の前で発表をする授業がありますが、そうした場所を使って、皆さんの好意に甘えて拙い発表をしながら、さまざまなご意見をいただきました。快刀乱麻を断つごとく頭の回転が早い人もおられれば、哲学者のように執拗にぐるぐると思考が渦巻く人もおられ、本当にびっくりしました。

指導教員の望月先生はじめ、さまざまな方のご意見を得てなんとか修士論文を書くことができましたが、やはり、自分ひとりで書いていけば全く別のものになったと思います。2年間で振り返って、最初に立てた目標の中で、できたこととできなかったことがやはりありま

した。中でも日本語への翻訳はほとんどやらず、もっとやりたかったし、やるべきだったのかもしれない。しかし、最初に立てた目標全体の5割くらいはやったと思います。それ以外に、自分は想像すらしていなかったけれども、さまざまな人からこういうことが大事だよと教えてもらった部分があり、それが2割くらいあるので、合計で7割くらいの目標達成度です。しかし、その2割は自分ひとりではなく、この大学院に来なければ決して気づかなかったものなので、かけがえのない2割です。完璧な理想の院生生活を送ったわけではないのですが、7割くらいできたので自分としてはそれなりに満足しています。

他人から言われた意見というのは、大事だなと思っても、自分の中で咀嚼して自分のものになるには時間がかかるとは思います。北大は幸いにして、図書館の資料が充実しているので、すぐに自分で調べ直すには絶好の環境でした。呉下の阿蒙の話ではありませんが、自分が自分でなくなっていくような感覚を味わうこともありました。

4月からは職場へと戻りますが、直接、ここで学んだことが役に立つ部署ではありません。ただし、2年間で身につけたことは残るとは思います。以前から生涯学習という言葉がよく使われていますが、専門的な知識というものは、これだけ情報や技術の回転が速い社会ではすみやかに陳腐化してしまいます。しかし、教育の効果というものは、そうした知識を与えるということよりも、経験を通じて人間性のなかの一般的な力として蓄えられる点にあると思います。私にとっては、この2年間はそういう時間であったと思います。これから私はしばらく生きていこうと思いますが、スラブ研究センターが、学問と教育の世界に生きる人にとってこれからも大事な存在であり続けることを願っています。

#### ◆ 2010年度大学院共通授業「地域研究と国際協力の接点」を開講 ◆

スラブ社会文化論専修は主としてアカデミックな研究の訓練をする場ではありますが、地域研究者にとって国際協力の現場感覚は非常に大切なものであり、また国際協力関連の仕事は院生の就職にとっても重要な選択肢の一つです。そこで、2010年度後期の大学院共通授業「スラブ・ユーラシア学Ⅰ」では、「地域研究と国際協力の接点」をテーマに、国際協力・外交関係の機関で活躍する人々や、国際協力を携わった経験を持つ研究者の話聞きながら、地域研究者が国際協力にどのように貢献しうるのか、また実務家として働く場合に地域研究の知見をどのように活かすのかを議論することにしました。授業は2011年1月31日（月）～2月2日（水）の3日間、集中講義形式でおこなわれ、各講義の講師・題目は以下の通りでした。



内田外務省上席専門官による講義風景

- 宇山智彦（センター）「序論：地域研究者にとって国際協力とは何か」
- 北野尚宏（JICA 東・中央アジア部長）「中央アジアに対する日本と中国の経済協力」
- 福田宏（センター）「事例としての中欧地域：ODAの『卒業生』とどう付き合うか」
- 内田一彦（外務省第四国際情報官室上席専門官）「ロシア CIS 諸国における外交活動の現場と研究者の役割」
- 下社学（JETRO 海外調査部主幹）「わが国の対中央アジアビジネスの現状と今後の展望」
- グロムジョン・ジュラ・ボボゾダ（駐日タジキスタン大使）「中央アジアにおける開発と地域協力」（特別講演）

授業にはスラブ社会文化論の院生のほか、他研究科（医学、教育学、理学、農学）の院生なども参加しました。そして援助と国益の関係や、他の大国、特に中国の力が増す中での日本の国際協力のあり方などについて、極めて熱心に議論がおこなわれました。日本人学生が、日本の国際的プレゼンスの小ささに悲観的になりがちなのに対し、むしろ外国人学生たちが日本の援助を評価し、日本はもっと自信を持つべきだと発言していたのが印象的でした。

若手研究者・院生と外交・国際協力の接点としては、大使館専門調査員の仕事が比較的意識されやすく、今回の授業でも関心を集めました。しかしそれ以上に、国際協力を専門として第一線で活躍する実務家の話は、院生が普段接することのないさまざまな立場からのものの見方を教えてくれ、大変刺激になったとの感想が院生から相次ぎました。多忙な本務のスケジュールの合間を縫って来札して下さった講師の皆様には、お礼を申し上げます。また、授業に参加した、所属・専門を異にする院生たちの間では、その後も交流が続いているようです。[宇山]

## 図書室だより

### ◆ Russian Military Intelligence on Asia の購入 ◆

上記の資料は、オランダ IDC 社の製作によるもので、①モスクワのロシア国立軍事史文書館 РГВИА の所蔵する文書・地図等を収録した Archive Series, 1620-1917、マイクロフィルム 93 巻と、②参謀本部軍事教育委員会の編集により 1883 年から 1914 年まで、刊行された Сборник географических, топографических и статистических материалов по Азии. 全 96 冊を収めた Secret Prints 1883-1914、マイクロフィッシュ 502 枚から構成されます。

① は、上記文書館の軍事教育アーカイヴのうち、中国、日本、オスマン帝国、ペルシャなどに関する Fond 444 ~ 451 を収録し、主として 19 世紀以降、各地域に駐在した軍関係者からのレポートや本国との通信、および地図資料等をその内容としています。

② は、極東、中央アジア、インド、ペルシャ、オスマン帝国等の軍事、交通、貿易、民族等の情勢に関するレポートを収録する本篇 87 冊、付録 9 冊から成ります。なお、ほとんどの分冊には、標題紙の右上に「秘密」もしくは「非公開」と表示されていますが、一部の記事について調べたところ、ウズベキスタン国立図書館の所蔵する『トルキスタン集成』に収録されているもの、あるいは、その編纂者ヴラジミル・メジョフ (1830-1894) の編集した『シベリア書誌 Сибирская библиография』に収録されているものがありました。これは、「秘密」とは言っても、軍関係者以外にもある程度アクセスの可能性があったことを示すように思われます。

なお、この資料は本センターの他、京都大学地域研究統合情報センターが収蔵しています。[兔内]

### ◆ FBIS データベースの導入 ◆

Foreign Broadcast Information Service (略称 FBIS) は、1941 年に米国ルーズベルト大統領の指示で発足した Foreign Broadcast Monitoring Service (FBMS) をその前身とし、CIA の管轄下において外国の放送や新聞等の情報を分析・翻訳する機関です。センターは、その発行する Dairy Report のソ連邦篇 / 中央ユーラシア篇を、1984 年から 1996 年にかけて購読していました。

センターでは、この4月から、この Dairy Report をオンライン・データベース化した製品の一部を利用できるように契約しましたのでお知らせします。

利用できる範囲は、1974～1996年の、地域6. 東欧諸国および、地域7. ソ連邦と旧ソ連諸国です。なお、同時利用端末数は無制限ですが、センター内のIPアドレス（学内でなく）からのアクセスに限定されますので、ご注意願います。[兔内]

## 編集室だより

### ◆ スラブ・ユーラシア叢書第9巻の刊行 ◆

『ポスト社会主義期の政治と経済：旧ソ連・中東欧の比較』（仙石学・林忠行編著）が北大出版会から「スラブ・ユーラシア叢書」シリーズの一つとして刊行されました。内容は以下のとおりです。

仙石学・林忠行 序章：体制転換を理解する：政治比較の視点から

#### 第1部：制度構築・再編の比較分析

平田武 「歴史の遺産」とその影響：旧東欧諸国における政治発展と制度選択・デモクラシー

林忠行 ポスト共産期の東中欧諸国の地方制度改革：広域自治体設置問題をめぐって

大串敦 ソ連共産党中央委員会からロシア大統領府へ：ロシアにおける半大統領制の発展

#### 第2部：政党システム形成の比較分析

中田瑞穂 政党戦略と政党間競合：東中欧政党システムにおける二極競合化？

久保慶一 旧ユーゴスラビア諸国の政党システム：専門家サーベイの結果に基づく政党の「政策位置」の測定

溝口修平 政党システムの分岐点：ロシア、ウクライナにおける政治エリートの連合再編過程の比較分析

小森宏美 エストニアとラトヴィアの政党政治比較：歴史的要因としてのロシア語系住民問題を軸に

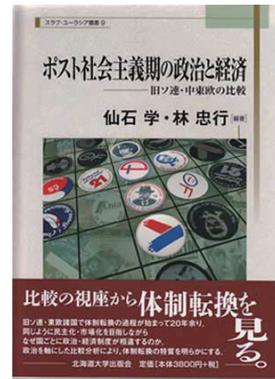
#### 第3部：比較政治経済の視点から

上垣彰 東欧における経済的後進性について：ルーマニアおよびブルガリアを例として

仙石学 ポスト社会主義の中東欧諸国における福祉制度の多様性：あるいは「体制転換研究」と「福祉政治研究」の架橋の試み

田畑伸一郎 ロシア財政制度の資本主義化

仙石学 終章：体制転換研究の意義：研究の成果と残された課題



### ◆ 『スラヴ研究』 ◆

『スラヴ研究』第58号は、審査の結果、以下の原稿を掲載することになりました（掲載順は未定）。こちらの事情で編集作業が遅れております。早期に出版できるように鋭意努力してまいります。ご迷惑をおかけいたします。

#### <論文>

秋山徹 「クルグズ遊牧社会におけるロシア統治の展開：統治の仲介者としてのマナブの位置づけを中心に」

安達大輔 「ゴゴリ『友人たちとの文通からの抜粋箇所』における反省の展開」

貝澤哉 「詩的言語における身体の問題：ロシア・フォルマリズムの詩学をめぐって」

- 志田仁完 「ソ連構成共和国における第二経済、1969-1988年：アーカイブ資料に基づく新推計」  
下里俊行 「あるロシア正教神学生の自己形成史：ニコライ・ナデージュデンの出会いと読書」  
福嶋千穂 「近世ポーランド・リトアニア共和国におけるルテニア：教会合同問題にみる諸階層」  
三谷恵子 「南モラヴィアのクロアチア語：言語の維持と社会的背景に関する一考察」

### <研究ノート>

- 斎藤祥平 「オルタナティブとしてのユーラシア主義：言語学者 N.S. トルベツコイによるソ連とナチスへの思想的反応」

今回は、個別の切り口から大きな問題に挑む重厚な力作が揃いました。丁寧な査読をしてくださったレフェリーの皆様へ御礼を申し上げます。残念ながら不採用となった方も、次回以降ぜひ再挑戦して下さい。次の第59号の原稿締め切りは、2011年8月末の予定です。センターのホームページに掲載されている投稿規程・執筆要領等を熟読のうえ、締切厳守でご提出ください（事前申し込みは不要です）。[長縄]

## ◆ ACTA SLAVICA IAPONICA ◆

第30号の掲載論文は以下の4本に決まりました（順不同）。ただいま編集集中で、今年夏の発行を目指します。

- Pami Aalto The Emerging New Energy Agenda and Russia: Implications for Russia's Role as a Major Supplier to the EU  
Baryshev Eduard The General Hermonius Mission to Japan (August 1914 – March 1915) and the Issue of Armaments Supply in Russo-Japanese Relations during the First World War  
KIKUTA Haruka *Ruh* or Spirits of the Deceased as Mediators in Islamic Belief: The Case of a Town in Uzbekistan  
Yulia Mikhailova Japan and Russian-Japanese Relations in Representation of Russian Newspapers: 1906-1910

第31号の投稿に対する査読はただいま最終段階で、まもなく掲載論文を確定する予定です。今年末ごろの発行を目標にしております。また、第32号の投稿締め切りは2011年7月15日です。積極的な投稿をお待ちしています。[松里]

## 誰が何をどこで

2010年（1～12月）の専任／非常勤研究員・客員教授の研究成果、研究余滴のアンケート調査（提出は任意）を以下のようにまとめました。なお分類方法は北大の大学情報データベースになっています。[五十音順] [大須賀]

阿部賢一 ① 2 その他業績（論文形式） (3) 書評 ▼奥彩子著『境界の作家 ダニロ・キシユ』（松籟社、2010）『図書新聞』2971（2010.6.19） (4) 翻訳 ▼ボフミル・フラバル著『わたしは英国王に給仕した』264（河出書房新社） ▼ウラジミール・ビルグス著「認知されながらも、未知の20世紀のチェコ写真」（『暗がりのあかり チェコ写真の現在展』8-16, 資生堂） (5) その他 ▼（図録原稿）芸術家の転機、あるいはプラハにおけるミュシャ（『生誕150年記念：アルフォンス・ミュシャ展』234-237, 産経新聞） ▼（図録原稿）多面的な表現者：カレル・ゼマンの魅力（『チェコ・アニメ：もうひとりの巨匠 カレル・ゼマン展』14-15, イデップ）

家田修 ① 1 学術論文 ▼ Integrated Environmental Policy from a Regional Perspective in Slavic Eurasia, "Forum on Public Policy," *A Journal of the Oxford Round Table*, 3 [http://www.forumonpublicpolicy.com/spring2010.vol2010/environment20103.html] ① 4 その他業績（著書形式） ▼（事典項目）経済体制の変革と環境：ソ連東欧の近代と自然改造（『地球環境学事典』508-509, 弘文堂）

岩下明裕 ① 1 学術論文 ▼「4でも0でも、2でもなく」再論(松井康浩編『20世紀ロシア史と日露関係の展望』189-214, 九州大学出版会) ▼ New Geopolitics and Rediscovery of the U.S.-Japan Alliance: Reshaping “Northeast Asia” beyond the Border (ブルッキングス研究所のウェブサイト [http://www.brookings.edu/~media/Files/rc/papers/2010/09\_northeast\_asia\_iwashita/09\_northeast\_asia\_iwashita.pdf])

① 2 その他業績(論文形式) (2) 研究ノート等 ▼同盟の新しい地平を目指して(『日米安保』とは何か』149-162, 藤原書店) ▼境界研究からみた「沖縄」『環』43:218-224 ▼ボーダースタディーズの胎動『国際政治』162:1-8 ① 3 著書 ▼(編著)『日本の国境・いかにこの「呪縛」を解くか』247(北海道大学出版会) ① 4 その他業績(著書形式) ▼(編集)原子カルネサンスと日米同盟:新しい市場の発見と核拡散防止『スラブ研究センターレポート』5 ▼(編集)第1回日中・ユーラシア専門家対話『スラブ研究センターレポート』6 ▼(編集)日米同盟における地域的安全保障と沖縄『スラブ研究センターレポート』7 ▼(編集)根室リトリート 2009『ライブ・イン・ボーダースタディーズ』1 ▼(編集)「境界(ボーダー)」を沖縄で考える『ライブ・イン・ボーダースタディーズ』2 ▼(編集)ボーダースタディーズ・セミナー 2009『ライブ・イン・ボーダースタディーズ』3 ▼(編集)国境フォーラム IN 対馬『ライブ・イン・ボーダースタディーズ』号外 ① 5 学会報告・学術講演 ▼日米中口「四角形」:今後のシナリオ, 国務院発展研究センター欧亚社会発展研究所, 北京(2010.1.11) ▼Northeast Asian Quadrangle US-China-Russian Triangle and Japan, The Brookings Institution, ワシントン DC (2010.3.8) ▼(池直美と共同報告) Borders in Representation: Case of Museum Exhibition at the Hokkaido University Museum, ABS, リノ(2010.4.14-17) ▼Eurasia Border Review: Case of Museum Exhibition, IGU, テルアピブ(2010.7.12-15)

宇山智彦 ① 1 学術論文 ▼ The Roles of Small Regions in Intercultural Relations and Conflicts: The Bökey Horde, Gorno-Badakhshan and Abkhazia (Anita Sengupta and Suchandana Chatterjee, eds., *Eurasian Perspectives: In Search of Alternatives*, 64-77, Delhi: Shipra Publications) ▼ Взгляды казахской интеллигенции на суд биев, русский суд и шариат (конец XIX—начало XX вв.) (*Древний мир права казахов: материалы, документы и исследования в десяти томах*. Т. 10, 296-301, Алматы: Жеті жарғы)

▼ Mutual Relations and Perceptions of Russians and Central Asians: Preliminary Notes for Comparative Imperial Studies (*World History Studies and World History Education: The Proceedings of the First Congress of the Asian Association of World Historians*, 1-15, Osaka: The Asian Association of World Historians) (CD-ROM) ① 2 その他業績(論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼クルグズスタン(キルギス)の再チャレンジャー革命:民主化・暴力・外圧(スラブ研究センターウェブサイト [http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/center/essay/20100420uyama\_j.html], 1-10) (2) 研究ノート・学界動向 ▼Проблемы религии и просвещения в работах казахской интеллигенции: Машхур-Жусип и его современники (*Материалы международной научно-практической конференции «VII чтения Машхур-Жусипа»*, 28-33, Павлодар: Павлодарский государственный университет) ▼国際ワークショップ“Religion and Society in Central Eurasia: New Sources for the Religious History of Kazakhstan”に参加して『日本中央アジア学会報』6:71-75 (5) その他 ▼悲しみと希望の国・カザフスタン(『FOCUS ON KAZAKHSTAN 2000-2010』(映画カタログ)4-6, カザフスタン映画上映実行委員会) ▼(インタビュー) Не ошибиться в богах, *Слово Кыргызстана*, 8-9 (2010.10.22) ▼(座談会) Стремления японцев поднять свою страну были близки идее Алаш-Орды, *Радио Азаттык* (2010.12.13) [http://rus.azattyq.org/content/alashorda\_kazakhstan\_independence\_zheltoksan\_/2244668.html] ① 5 学会報告・学術講演

▼ Central Eurasian Studies in Japan: A Close Combination of Russian and Oriental Studies, ICCEES VIII World Congress, Stockholm (2010.7.30) ▼Проблемы религии и просвещения в работах казахской интеллигенции: Машхур-Жусип и его современники, VII чтения Машхур-Жусипа, Павлодарский государственный университет (2010.9.15-16) ▼Бакытжан Каратаев и алашордынцы: изменения взаимоотношений, Международная конференция, посвященная 150-летию Бакытжана Каратаева, Западно-Казахстанский областной центр истории и археологии (2010.9.18) ▼グレートゲーム再考:中央アジアにとっての帝国間競争の意味, 国際政治学会 2010 年度研究大会部会 4「地域からの帝国論:比較史と現在」, 札幌 (2010.10.29-31)

ウルフ、ディビッド ① 1 学術論文 ▼スターリン:国境の男『国際政治』162:24-40 ▼ハルビンとダリーニー(大連)の歴史:1898年から1903年まで(和田春樹ほか編『東アジア近現代通史2』69-92, 岩波書店) ① 2 その他業績(論文形式) (3) 書評 ▼Vesselin Dimitrov, *Stalin's Cold War: Soviet Foreign Policy, Democracy and Communism in Bulgaria, 1941-1948* (Palgrave Macmillan, 2008), *Cold War History*, 10(1):131-132 ▼Kimie Hara and Geoffrey Jukes, eds., *Northern Territories, Asia-Pacific Regional Conflicts, and the Aland Experience: Untying the Kurillian Knot* (Routledge, 2009), *Pacific Affairs*, 83(4):788-789 ① 5 学会報告・学術講演 ▼Interkit: Russian Sources by SKYPE, Budapest (2010.2) ▼Russia's Great War

and Revolution: Eastern Perspectives, Uppsala (2010.7) ▼ Rethinking Russo-Japanese Relations in the 19th Century, Russian History Association of Japan Roundtable, 立教大学 (2010.10) ▼ The Perils and Cures of Military History, 42nd Annual Convention of ASEEEES, Los Angeles, CA (2010.11) ▼ Comrade Stalin and the Chinese Way in South and Southeast Asia, Hangzhou, China (2010.11) ▼ Joseph Stalin's India Policy, 1947-1953, Nehru Memorial Library, New Delhi (2010.12)

**大平陽一** ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (2) 研究ノート ▼ 両大戦間期チェコの左翼文化内部とその分裂: プロレタリア文化・アヴァンギャルド・社会主義リアリズム (『RUSSIAN PRAGUE: 両大戦間のプラハにおける文化の交錯の研究』 [(研究課題番号 19320053) 平成 19 年度~平成 21 年度科学研究費補助金 (基盤研究 B) 研究成果報告書] 23-46)

**越野剛** ㊦ 3 著書 ▼ (田畑伸一郎、後藤正憲と共編) 『比較研究の射程: これまでの研究の集約と今後の可能性』 [比較地域大国論集 4] 53 (スラブ研究センター) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ Ladies Thrown into Volga: Literary Image of Sten'ka Razin, East-Asian Conference for Slavic Eurasian Studies, Seoul (2010.3.4-5) ▼ The Chernobyl Disaster in Contemporary Belarusian Culture, International Council for Central and East European Studies (ICCEES) VIII World Congress, Stockholm (2010.7.26-31)

**後藤正憲** ㊦ 1 学術論文 ▼ チュヴァシの口碑におけるヴォルガの表象: 歴史の記憶と想像力についての考察 『北方人文研究』 3:1-14 ▼ Представление о Волге в чувашской народной словесности (Региональные особенности аграрных отношений в России: История и современность, Часть 1, 240-245, Чебоксары) ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (5) その他 ▼ 先住民族のうた・こころ (チュヴァシ 1~3) 『婦人の友』 104(10)(11)(12):152-155; 150-153; 188-191 ㊦ 3 著書 ▼ (田畑伸一郎、越野剛と共編) 『比較研究の射程: これまでの研究の集約と今後の可能性』 [比較地域大国論集 4] 53 (スラブ研究センター) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ Demarcation and Recollection of Collectivity in a Chuvash Village, Russia, The International Conference on Ideals, Narratives and Practices of Modernities in Former and Current Socialist Countries, 国立民族学博物館 (2010.3.19-20) ▼ Взаимные отражения и присвоения своего образа между язычеством и христианством в Чувашии, Международная тюркологическая конференция «Чувашский язык и этнос в истории евразийской цивилизации», Чувашский государственный университет, Чебоксары (2010.9.17)

**阪本秀昭** ㊦ 1 学術論文 ▼ ヨーロッパ統合とアメリカ (天理大学 EU 研究会編 『グローバル化時代の EU 研究』 第 2 章, ミネルヴァ書房) ▼ EU の東方拡大とヨーロッパ東西文化 (天理大学 EU 研究会編 『グローバル化時代の EU 研究』 第 4 章, ミネルヴァ書房) (5) その他 ▼ 三間令子さんの手記『終戦時の記録』 『 Север-セーヴェル』 (ハルビン・ウラジオストクを語る会) 26:8

**田畑伸一郎** ㊦ 1 学術論文 ▼ ロシア経済の動向: 世界金融危機の影響と回復過程 『ロシア NIS 調査月報』 1-23 (2010.5) ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (5) その他 ▼ (公開講座) ロシア、中国、インドの共通性: 経済の視点から 『しゃりばり』 (2010.7) [http://www.hit-charivari.com/article/data/p0330.html] ▼ ロシアのエネルギー政策の動向: 東方シフトを中心に 『気候変動に関する意思決定ブリーフノート』 9:5-9 ㊦ 3 著書 ▼ (上垣彰と共編) *The Elusive Balance: Regional Powers and the Search for Sustainable Development* [比較地域大国論集 2] 203 (スラブ研究センター) ▼ (越野剛、後藤正憲と共編) 『比較研究の射程: これまでの研究の集約と今後の可能性』 [比較地域大国論集 4] 53 (スラブ研究センター) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ 世界金融危機下のロシア経済, 第 1 回日中・ユーラシア専門家対話, 北京 (2010.1.11) ▼ (上垣彰と) ロシア、中国、インドの経済発展モデルの比較, 比較経済体制学会全国大会, 大阪市立大学 (2010.6.5) ▼ ロシア石油・ガスの東アジア市場への進出: 現状と見通し, 第 3 回北東アジア地域協力発展国際フォーラム, ハルビン (2010.6.14) ▼ Russia's Economic Growth Model in Comparison with China and India, International Council for Central and East European Studies (ICCEES) VIII World Congress, Stockholm (2010.7.28) ▼ Oriental Motifs in Our Ongoing Project, Entitled "Comparative Research on Major Regional Powers in Eurasia," ICCEES VIII World Congress, Stockholm (2010.7.30) ▼ Common Features of the Russian Economy with China and India, 11th Bi-Annual Conference of EACES, Tartu (2010.8.27) ▼ (Xu Liu と) Russia's Energy Policy in the Far East and East Siberia, 10th Annual Aleksanteri Conference, Helsinki University (2010.10.28) ▼ Common Features of the Economy of Russia with China and India: Why and How Did They Increase Foreign Reserves?, 42nd Annual Convention of ASEEEES, Los Angeles, CA (2010.11.19)

**宍内勇津流** ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼ 専門図書館としての? 北海道大学スラブ研究センター図書室 『専門図書館』 244:34-44 ▼ ロシアの公共図書館の現状とその発展構想 『カレント・アウェアネス』 303:14-16 ▼ アメリカ図書館協会と「図書館文化」 『北の図書館』 15:2-4 (5)

その他 ▼アトスにおけるロシア人に関する最近の研究から、「プラトンとロシア」研究会，スラブ研究センター（2010.2.28） ▼「トルケスタン集成」の提供と索引について，共同研究『トルキスタン集成』のデータベース化とその現代的活用の諸相」研究会，京都大学地域研究統合情報センター（2010.8.4）

**長縄宣博** ¶ 2 その他業績（論文形式）（3）書評 ▼濱本真実著『「聖なるロシア」のイスラーム：17-18世紀タタール人の正教改宗』（東京大学出版会，2009）『内陸アジア史研究』25:189-197

▼ Il'dus Kotdusovich Zagidullin, *Islamskie instituty v Rossiiskoi imperii: mecheti v evropeiskoi chasti Rossii i Sibiri* (Kazan': Tatarskoe knizhnoe izdatel'stvo, 2007); Salavat Midkhatovich Iskhakov, *Pervaia russkaia revoliutsiia i musul'mane Rossiiskoi imperii* (Moscow: Izdatel'stvo "Sotsial'no-politicheskaia mysl'," 2007) *Kritika: Explorations in Russian and Eurasian History* 11(3):682-692 (5) その他 ▼結語：近現代史の視点から（小澤実編『北西ユーラシア歴史空間の再構築：ロシア外部の史料を通じてみた前近代ロシア世界（共同利用・共同研究拠点公募プログラム・シンポジウム報告書）』293-299, 名古屋） ▼セッション2「イスラームの家と祖国の間での教育改革」，「イスラームと帝国：思想、教育、移動性の複雑な連結」新学術領域研究第5班・第4班合同中規模国際集会，千里（2010.1.23-24）におけるコメントータと全体の組織 ▼帝国を映す鏡としての人間の移動：基盤、ネットワーク、媒介者（1850年代から1930年代），比較帝国論の方法を考える，新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究，北海道大学（2010.4.24） ▼帰郷と拡散：地域大国における人間の移動と越境，新学術領域研究第4回国際シンポジウム，大阪（2010.12.11-12）

¶ 5 学会報告・学術講演 ▼帝国とイスラーム・ネットワーク：欧露のムスリムの場合（19世紀後半から20世紀初頭），比較教育社会史研究会2010年春季大会，同志社大学（2010.3.27） ▼ Политика благонадежности: борьба с панисламизмом и ее последствия в многоконфессиональном Волго-уральском регионе, 1905-1917, Исповеди в зеркале: межконфессиональные отношения в центре Евразии, на примере Волго-Уральского региона (XVIII-XXI вв., Nizhnii Novgorod (2010.5.27) [<http://www.centre-fr.net/spip.php?article298&lang=ru>] ▼ An Embryo of Civil Society? Philanthropy and War among the Muslims in the Volga-Urals Region, International Council for Central and East European Studies (ICCEES) VIII World Congress, Stockholm (2010.7.27) ▼ A Mirror of Imperialism? Muslim Mediators for the Russian Empire and USSR in Arabia, 1890s-1930s, 42nd Annual Convention of ASEES, Los Angeles, CA (2010.11.19). パネル“Building the Russian Empire: A View from the Ground Floor”も組織 ▼ The War on Pan-Islamism in the Multi-Confessional Setting of Russia's Volga-Urals Region, 1905-1917, IAS 3rd International Conference: New Horizons in Islamic Area Studies, 京都国際会議場（2010.12.18）

**中村唯史** ¶ 1 学術論文 ▼ソ連における翻訳の問題に寄せて：ガムザトフの詩『鶴』再考まで『辺境と異境：非中心におけるロシア文化の比較研究』1:18-35 ¶ 2 その他業績（論文形式）（1）総説・解説・評論等 ▼19世紀末－20世紀初頭のロシア神秘主義と「東洋」の表象，新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」HP，第6班文化研究成果・活動報告 [[http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/rp/group\\_06/achievements/files/20091220\\_nakamura.pdf](http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/rp/group_06/achievements/files/20091220_nakamura.pdf)] ▼1910-20年代のソ連批評理論における声とテキスト『Nord-Est』（日本フランス語フランス文学東北支部会報）3:3-6（3）書評 ▼乗松亨著『リアリズムの条件：ロシア近代文学の成立と植民地表象』（水声社，2009）『ロシア語ロシア文学研究』42:80-83（5）その他 ▼『山形新聞』文化欄コラム「<ことばの杜>へ」：富沢赤黄男『黙示』（2010.2.13）；カジミール・マレーヴィチ『キュビズム、未来主義からスプレマチズムへ』（2010.4.10）；石川啄木『飛行機』（2010.6.4）；レフ・トルストイ『戦争と平和』（2010.7.31）；瀬田貞二訳『三びきのやぎのがらがらどん』（2010.9.25）；岡本かの子『東海道五十三次』（2010.11.20） ▼宮崎駿はエコな作家か？：その自然観の移り変わり，山形市立図書館市民講座（2010.2.7） ▼歴史の中のロシア・アヴァンギャルド：成立までとその時代，山形美術館ミュージアムスクール（2010.4.29） ▼境界をめぐる思考：近代ロシアのコーカサス・イメージ，東北学院大学オープン・リサーチ・センター公開講演会「コーカサスとヨーロッパ」（2010.9.25） ▼山形フォーラム「ロシア文学映画館シリーズ」解説：『石の花』（2010.1.29）；『外套』（2010.2.26）；『機械じかけのピアノのための未完成の戯曲』（2010.3.26）；『ワッサ』（2010.6.25日）；『妖婆・死棺の呪い』（2010.7.16）；『カラマーゾフの兄弟』（2010.8.27）；『ワーニャ伯父さん』（2010.9.24）；『鏡』（2010.10.29）；『僕の村は戦場だった』（2010.11.26）；『ハムレット』（2010.12.17） ¶ 3 著書 ▼（岩本和久氏と共訳）ヴィクトル・ペレーヴィン著『寝台特急 黄色い矢』282（群像社） ¶ 5 学会報告・学術講演 ▼ Представления Волги как оси России / Руси в произведениях М. Гольцкого, EACES 2010 “Russia and Eurasia in the Changing World Order,” ソウル（2010.3.4-5） ▼ Before an Unknowable Current: Boris Eikhenbaum's Perception of History, International Council for Central and East European Studies (ICCEES) VIII World Congress, Stockholm (2010.7.26-31)

**野町素己** ㊦ 1 学術論文 ▼ (Bernd Heine と) Is Europe a Linguistic Area? (NOMACHI Motoki, ed., *Grammaticalization in Slavic Languages: From Areal and Typological Perspectives* [Slavic Eurasian Studies No. 23], 1-26, SRC) ▼ カシュブ語の受容者受動構文とその文法化をめぐって『スラヴ研究』57:27-57 ▼ О изоставлjanju pomoćnog glagola „biti“ u lehitskim jezicima [レヒト諸語における助動詞 be の省略について] *Јужнословенски филолог*, LXV:331-344 ㊦ 3 著書 ▼ (中島由美と)『エクスプレス：セルビア語・クロアチア語』149 (白水社) ▼ (共著)バルカン半島の諸言語とバルカン言語学 (長與進、桑野隆編『ロシア・中欧・バルカン世界のことばと文化』97-114, 成文堂) ▼ (編書) *Россия и русские глазами инославянских народов: язык, литература, культура 1* [スラブ・ユーラシア研究報告集 3] 183 (スラブ研究センター) ▼ (編書) *Grammaticalization in Slavic Languages: From Areal and Typological Perspectives* [Slavic Eurasian Studies No. 23], 133 (SRC) ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (5) その他 ▼ ひとりの詩人のひとつの言語：孤高のラフ詩人ウンドラ (オンドラ)・ウィソホルスキ (1905-1989) 没後 20 周年に寄せて『スラブ研究センターニュース』120:22-24 ▼ 「第 17 回バルカン・南スラヴ学会」及び「アクセント論特別講義 (?)」に参加して『スラブ研究センターニュース』121:16-18 ▼ 生き残りをかけるもう一つのブルガリア語文化：セルビアのパナト・ブルガリア語の現状『スラブ研究センターニュース』122:20-24 ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ The Recipient Passive in Kashubian: Grammatical Replication and Innovation, International Council for Central and East European Studies (ICCEES) VIII World Congress, Stockholm (2010.7.26-31)

**林忠行** ㊦ 1 学術論文 ▼ チェコ政党政治における新自由主義：ヴァーツラフ・クラウスと市民民主党『聖学院大学総合研究所紀要』47:74-104 ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼ 東中欧における民主化とナショナリズム：チェコスロヴァキアの事例から (田中浩編『ナショナリズムとデモクラシー』163-182, 未來社) ㊦ 3 著書 ▼ (仙石学と共編)『体制転換研究の先端的議論』[スラブ・ユーラシア研究報告集 2] 91 (スラブ研究センター)

**堀江典生** ㊦ 1 学術論文 ▼ ロシアの外国人労働者管理の課題：高度人材の受入体制をめぐって (大津定美、韓福相、横田高明編著『北東アジアにおける経済連携の進展』第 10 章, 日本評論社) ▼ 水道事業から見たロシアの水環境『ロシア NIS 調査月報』50-60 (2010.4) ▼ Образ мигрантов из Средней Азии в Москве, Достойные условия трудовой жизни как основа развития общества (*Сборник материалов международной научно-практической конференции*, 72-78, Воронеж) ▼ ロシア極東地域の農業発展を担う中国人労働者：中ロ国境地域間農業協力の内実『エージェック・レポート』(北陸環日本海経済交流促進協議会) 51:46-54 ▼ (S. Ryzantsev, K. Kumo と共著) Migrant Workers from Central Asia into the Russian Federation, *Center for Economic Institutions Working Paper Series* No. 2010-1 (一橋大学経済研究所) ▼ (S. Ryzantsev と共著) Some Fact-findings from In-depth Interviews to Central Asian Migrants in Moscow (*The Migratory Bridge between the Central Asia and Russia in the Conditions of an Economic Crisis: Materials of the Second International Symposium*, 537-546, Moscow: Экономическое образование) ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼ 地域研究と産学連携：ロシア市場に関わる企業戦略を構築する『富山大学リエゾンニュース』5:1-2 (3) 書評 ▼ A.G. ラーリン著『ロシアにおける中国人移民 (露語)』(Восточная книга, 2009)『境界研究』1:165-170 (5) その他

▼ Central Asia, 北海道大学大学院共通授業科目「境界研究 I」(2010.7.26) ㊦ 3 著書 ▼ (編著)『現代中央アジア・ロシア移民論』436 (ミネルヴァ書房) ▼ (大津定美、松野周治と共編著)『中ロ経済論：国境地域から見る北東アジアの新展開』360 (ミネルヴァ書房) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ ロシアの外国人就労に対する規制について，第一回日中ユーラシア対話，北京 (2010.1.10) ▼ ロシアにおける人事労務管理：工場を例とした若干の考察，一橋大学経済研究所ロシア研究センター研究プロジェクト「ロシアにおける市場環境と政財関係に関する総合的研究」総括ワークショップ，東京 (2010.1.30)

▼ Russia's Labor Migration Management and Northeast Asia, 韓国北東亜経済学会，ソウル (2010.2.9) ▼ Central Asian Migrants in Moscow: A Qualitative Survey, Workshop on Labor Migrants in Russia and Central Asia, 一橋大学経済研究所 (2010.5.20) ▼ 中央アジア移民管理と多国間国際協力の必要性に関する研究，アジアと日本の新しい関係構築に向けて (世界を対象としたニーズ対応型地域研究推進事業研究成果報告会)，時事通信ホール (2010.8.26) ▼ Central Asian Immigrants in Moscow-Realities Revealed by Their Own Words, International Conference "Researching Migration in Europe: Empirical Research, Theoretical and Methodological Challenges," University of Vienna (2010.9.21) ▼ 富山とロシア極東との経済交流の課題，富山大学極東地域研究センターシンポジウム「富山と対岸諸国との物流：韓国・ロシアとの関係と北東アジアの物流」，富山県民会館 (2010.10.20) ▼ 移民大國ロシアの軌跡：中国と中央アジアからの労働移動に着目して，ロシア・東欧学会 2010 年度研究大会，天理大学 (2010.10.23)

▼ Проблемы положения мигрантов из стран Центральной Азии в России, международный



5 (2010.12.17) (4) 翻訳 ▼ (松下隆志と) ウラジーミル・ソローキン著『青脂』(部分訳)『早稲田文学』3:496-598 ▼ (松下隆志と) ウラジーミル・ソローキン著『青脂』(部分訳)『早稲田文学』増刊π :101-254  
▼ドストエフスキー著『白痴 1-3』395;522;435 (河出文庫) (5) その他 ▼小説『アンナ・カレエーナ』: 時代を超えたその魅力 (『新国立劇場 2009/2010 公演 ポリス・エイフマンの「アンナ・カレエーナ」パンフレット』29-31, 新国立劇場運営財団) ▼ (亀山郁夫と共編) 古今東西のドストエフスキー: 世界編 (亀山郁夫、望月哲男『現代思想: ドストエフスキー (4月臨時増刊)』236-249, 青土社) ▼ (亀山郁夫と対談) ドストエフスキー: 読解の可能性 (亀山郁夫、望月哲男『現代思想: ドストエフスキー (4月臨時増刊)』92-113, 青土社) ▼マキシモヴィッチと19世紀のペテルブルグ, 北海道大学総合博物館セミナー (2010.3.13) ▼旅の時代 (高橋英樹編『北大総合博物館企画展示「花の白露交流史: 幕末の箱館山を見た男」図録 マキシモヴィッチ・長之助・宮部』41-46, 北大総合博物館) ▼没後100年トルストイを語る: 創作と社会活動: 枠に収まらぬ異形性『北海道新聞 (夕刊)』6 (2010.5.21) ▼白痴: 変幻する小説『週刊読書人』7 (2010.7.30) ▼没後100年トルストイを語る: 比喩表現: 多重の言語空間『北海道新聞 (夕刊)』5 (2010.12.24) ¶ 3 著書 ▼ (亀山郁夫と共編)『現代思想: ドストエフスキー (4月臨時増刊)』374 (青土社) ▼ (Boris Lanin と共編) *Sorokiniada: Eurasia Talks about Sorokin* [比較地域大国論集 5] 52 (スラブ研究センター) ¶ 5 学会報告・学術講演 ▼ «Образ Волги в русской литературе: Поэма «Вверх по Волге» Аполлона Григорьева, EASES 2010: Russia and Eurasia in the Changing World Order, Seoul (2010.3.4-5) ▼『アンナ・カレエーナ』を現代日本語に訳して: トルストイの文体論, 日本ユーラシア協会シンポジウム, 早稲田大学 (2010.4.23) ▼ Парадокс ограничения и бесконечности: о времени Мышкина, The XIVth Conference of the International Dostoevsky Society, Napoli (2010.6.17) ▼ Chair of the Panel: Sorokiniada: Vladimir Sorokin and Contemporary Russian Literature, International Council for Central and East European Studies (ICCEES) VIII World Congress, Stockholm (2010.7.28) ▼ Сила аналогия: о фигуре «как человек, который...» в романе «Анна Каренина», Tolstoy Live in Seoul, Korean University, Seoul (2010.10.1) ▼ Сила аналогия: о фигуре «как человек, который...» в романе «Анна Каренина», Annual Conference, Tam Kang University (2010.11.1) ▼『アンナ・カレエーナ』と『白痴』: アナロジーとパラドクス, ワークショップ『トルストイとドストエフスキー再考』, 日本ロシア文学会, 熊本学園大学 (2010.11.8)

## 会議 (2011年2月~4月)

### ◆ センター協議委員会 ◆

2010年度第6回 2月15日

- 議題
1. 教員の人事について
  2. 客員研究員について
  3. 名誉研究員制度について
  4. 大学間協定について
  5. 部局間協定について
  6. その他

2010年度第7回 2月21日

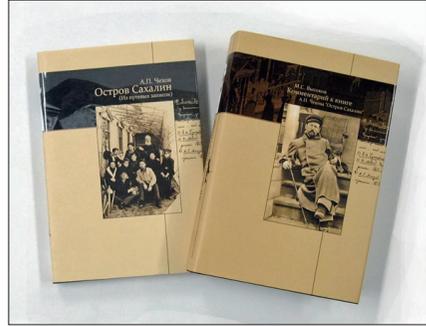
- 議題
1. 教員の人事について
  2. 名誉研究員について
  3. その他

# みせらねあ

## ◆ センター外国人研究員ミハイル・ヴィソコフ氏が 全ロシア地域・郷土史研究賞を受賞 ◆

新しいコメントリーを付したチェーホフ『サハリ  
ン島』の出版が、第8回全ロシア地域・郷土史研究  
賞「マーラヤ・ロージナ」を受賞しました。詳しく  
は以下のサイトをご覧ください（ロシア語）。[越野]

<http://fapmc.ru/material/rubrics/71/item1281.html>



## ◆ センターの役割分担 ◆

2011年度のセンター研究部専任教員の役割分担は、下記の通りです。[望月]

センター長 ..... 望月  
副センター長 ..... 田畑

### 【学内委員会等】

教育研究評議会、部局長等連絡会議 ..... 望月  
教務委員会 ..... 望月  
図書館委員会 ..... 兎内  
情報ネットワークシステム学内共同利用委員会 ..... 山村  
競争的資金にかかわる委員会 ..... 家田  
創成研究機構運営委員会／連絡会議 ..... 望月  
社会科学実験研究センター運営委員 ..... 望月  
アイヌ・先住民研究センター運営委員会 ..... 岩下  
オホーツク環境研究ネットワーク ..... 田畑  
全学運用教員審査会委員 ..... 望月  
北方圏フィールドセンター委員 ..... 山村  
情報基盤センター協議員 ..... 山村  
利益相反委員会 ..... 家田  
知財法委員会 ..... 家田  
情報セキュリティ委員会 ..... 松里

### 【学外委員等】

国立大学附置研究所・センター長会議 ..... 望月  
国立大学共同利用共同研究拠点協議会幹事 ..... 望月  
JCRES 日本代表 ..... 松里  
JCRES 事務局長 ..... 望月  
地域研究コンソーシアム理事 ..... 望月  
地域研究コンソーシアム運営委員 ..... 家田／野町  
京都大学地域研究統合情報センター拠点運営委員 ..... 岩下

京都大学東南アジア研究所拠点運営委員 ..... 家田  
 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所拠点運営委員 ..... 岩下

【センター内部の分担】

大学院講座主任・教務委員会.....	宇山	Kuzio (2011.11.1-2012.3.31).....	松里
入試.....	山村	Levinton (2011.6.1-10.31).....	望月
将来構想.....	田畑／松里／宇山／岩下	Shakhnazaryan (2011.11.1-2012.3.31).....	松里
総合特別演習担当....	岩下 (前期) / 家田 (後期)	Shishkin (2011.11.1-2012.3.31).....	ウルフ
全学教育科目責任者.....	宇山	鈴川・中村基金.....	野町
全学教育科目総合講義.....	池	日本人客員研究員.....	山村
全学教育科目演習.....	宇山	公開講座.....	長縄
点検評価.....	松里／田畑	専任研究員セミナー.....	家田
夏期シンポ (7月).....	ウルフ／岩下	諸研究会幹事.....	野町
冬期シンポ (1月).....	宇山	雑誌編集委員会.....	宇山／長縄／野町 (望月) / 松里 / ウルフ
GCOE 冬期シンポ (11月).....	岩下	欧文雑誌.....	松里／野町／ウルフ
図書.....	家田	和文雑誌.....	長縄
情報.....	岩下	スラブ・ユーラシア叢書.....	田畑
予算.....	田畑	ニューズレター和文.....	家田 / (望月)
外国人プログラム FVFP.....	家田	ニューズレター欧文.....	ウルフ / (岩下)
Astafieva (2011.6.1-10.31).....	長縄		
Kamusella (2011.6.1-10.31).....	野町		

◆ 人物往来 ◆

ニュース 124 号以降のセンター訪問者 (客員、道央圏を除く) は以下の通りです (敬称略)。  
 [望月／大須賀]

- 1月25日 森田正信 (文部科学省研究振興局)、木野泰宏 (同)
- 2月2日 Gulomjon J. Bobozoda (タジキスタン大使)
- 2月4日 Evgeny Gontmakher (現代発展研究所、ロシア)
- 2月8日 伊藤美和子 (大阪大他)
- 2月9日 Kateřina Fialková (チェコ大使)
- 2月10日 Kuanysh Tastanbekova (筑波大)
- 2月15日 毛利公美 (一橋大)
- 2月18-19日 石川徹也 (東京大)、石川正敏 (東京成徳大)、梅川通久 (東京外国語大)、桶谷猪久夫 (大阪国際大)、久保正敏 (国立民族学博物館)、後藤真 (花園大)、杉本重雄 (筑波大)、関野樹 (総合地球環境学研究所)、内藤求 (ナレッジシナジー)、永田好克 (大阪市立大)、原正一郎 (京都大)、平松晃一 (名古屋大)、三木理史 (奈良大)
- 2月23日 小椋彩 (東京大)
- 2月25日 加藤達矢 (文部科学省研究振興局)
- 2月26日 Wang Minjan (CNPC、中国)、Wang Haiyan (CNPC、中国)、上垣彰 (西南学院大)、片山博文 (桜美林大)、金野雄五 (みずほ総合研究所)、徳永昌弘 (関西大)、西村可明 (環日本海経済研究所)、服部倫卓 (ロシア NIS 貿易会)、松本かおり (神戸国際大)、本村真澄 (JOGMEC)
- 2月28日 江村公 (京都造形芸術大)
- 3月1日 今仁直人 (一橋大)、貝澤哉 (早稲田大)、北見諭 (神戸市外国語大)、坂庭淳史 (早稲田大)、下里俊行 (上越教育大)、根村亮 (新潟工科学)、室井禎之 (早稲田大)、渡辺圭
- 3月2日 加藤有子 (東京大)、横手慎二 (慶応大)
- 3月3日 Jiří Nekvapil (カレル大、チェコ)、塩谷哲史 (筑波大)

- 3月5-6日 岩本和久（稚内北星学園大）、鈴木正美（新潟大）、鳥山祐介（千葉大）、長谷川章（秋田大）、三浦清美（電通大）
- 3月9日 橋本順光（大阪大）
- 3月10日 Dieter Stern（ Gent 大、ベルギー）
- 3月11日 Arvind Gupta（インド防衛問題研究所）、S. S. Parmar（同）、Rajaram Panda（同）
- 3月13日 李鐘奭（元韓国統一部長官）、韓恵仁（建国大、韓国）、洪翼杓（韓国対外経済政策研究所）、白永瑞（延世大、韓国）、木村貴（九州大）、森善宣（佐賀大）
- 3月15日 Ruslan Baryshev（シベリア連邦大、ロシア）、Dmitrii Brodnikov（メンデレエフ記念チュメニ地方リサーチライブラリー、ロシア）、Petr Bykov（エリツィン記念大統領図書館、ロシア）、Aleksandr Chentsov（同）、Dar'ia Korneeva（同）、Dmitrii Shadrin（プーチン記念オムスク国立地域リサーチライブラリー、ロシア）、Anatolii Venediktov（エリツィン記念大統領図書館、ロシア）、Alekssei Vorob'ev（同）、Vasilii Vuss（ロシア連邦大統領府総務局、ロシア）、Andrei Zaitsev（エリツィン記念大統領図書館、ロシア）
- 3月18日 上垣彰（西南学院大）、仙石学（西南学院大）、月村太郎（同志社大）、古矢旬（東京大）、渡辺昭子（大阪教育大）
- 3月19-21日 秋山晋吾（一橋大）、姉川雄大（千葉大）、飯尾唯紀（城西大）、鈴木広和（大阪大）、戸谷浩（明治学院大）、三苫民雄（愛知産業大）、山本明代（名古屋市立大）、渡邊昭子（大阪教育大）
- 3月25日 橋本伸也（関西学院大）
- 3月28日 Romuald Huszcza（ワルシャワ大、ポーランド）
- 3月29日 志摩園子（昭和女子大）

### ◆ 研究員消息 ◆

ウルフ・ディビッド研究員は1月30日～2月8日の間、新学術領域研究第1班「国際秩序の再編」に関する研究打合せ及び資料収集のため、ロシアに出張。また、3月8～11日の間、科学研究費研究に関するワークショップ参加及び研究打合せのため、中国に出張。また、3月14～29日の間、科学研究費研究に関する資料収集のため、米国に出張。

松里公孝研究員は2月14～22日の間、新学術領域研究第2班「エリート、ガバナンス、政治的亀裂、価値」に関する ISPA-ECPR Joint Conference にて研究報告及び研究打合せのため、ブラジルに出張。また、2月22日～3月3日の間、科学研究費研究に関わるロシアの民族共存政策についての現地調査のため、ロシアに出張。また、3月7～20日の間、科学研究費研究に関わるインド・ムスリム宗教機構及び地方自治制度の現地調査のため、インドに出張。また、3月20～31の間、科学研究費研究に関わるアルメニア及びナゴルノ・カラバフ国家建設におけるアルメニア使徒教会が果たす役割についての現地調査及び東アジア学会開催について研究打合せのため、アルメニア、中国に出張。

長縄宣博研究員は3月5～18日の間、新学術領域研究第5班「国家の輪郭と越境」及び科学研究費研究に関わる学会にて研究成果報告及び資料収集のため、ロシア、フィンランドに出張。

岩下明裕研究員は3月23～26の間、東アジアコミュニティ会議にて研究報告及び研究打合せのため、韓国に出張。また、3月30日～4月5日の間、グローバル COE プログラム「境界研究の拠点形成」に関する AAS-ICAS Joint Conference 出席のため、米国に出張。

望月哲男研究員は4月9～17日の間、新学術領域研究第6班「地域大国の文化的求心力と遠心力」に関わる調査及び協定締結のため、ロシアに出張。

---

◆3・11 大津波で無数の方々が流された。死者、行方不明者数が、日ごとに膨れ上がり、ただただ驚愕しながらニュースを見る毎日。万単位のその数はなんだか抽象的で、亡くなった一人ひとりに人生があり、嘆き悲しむ親族がいるということにいまひとつ実感がもてず、戸惑っていたころ、センターで大変なことが起こった。4月20日、同僚の山下祥子さんが亡くなったというのだ！先週までピンピンしていたのに？今週3日間休んでいたのだからゴールデンウィークに先駆けて旅行にでも出かけたかと思っていたのに。◆毎日接していた元気な人がある日突然死ぬ、という体験は私にとって2度目だ。1度目は、母親。でも親が先に亡くなるのは「順番」だし、59歳という若さだったとはいえ、もう子は成人していた。しかし山下さんときたら、私よりだいぶ年下の42歳、お葬式の遺影はピンクの着物を着て年齢より若く見え、かわいらしく笑っていた。おおよそ「死」という言葉とは無縁なはずだったのに。いままでこれほど人の命の儚さを感じたことはない。◆パソコンのハード面、メンテナンス面にとんと疎い私にとって山下さんは頼もしい相談相手だった。何か相談に行くと安請け合いはせず、しばらく検討した後、的確な答えを返してくれたものだ。また、人からどう思われるかを気にせず常に自分に正直に発言するところ、仕事とプライベートをハッキリ分けるところが、とても好感が持てた。◆210号室のドアに彼女のコンピュータグラフィック作品（ちょっとというか、かなりユニーク）が貼ってあるので、興味のある方はご覧あれ。◆・・・とにかく、駆け抜けるように生涯を終えた山下祥子さんのご冥福を切に祈りたい。[大須賀]

(4ページの「訃報 山下祥子さん」を参照ねがいます。)

---

エッセイ	三輪博樹	インド研究者によるロシア出張の記録	p. 12
	松里公孝	西ベンガルの地方都市にて	p. 17
	大串 敦	ロシア研究者のデリー滞在よもやま話	p. 21
	松里公孝	国際・政治学会 (IPSA) と欧州政治研究コンソーシアム (ECPR) の合同コンフェレンス	p. 24
	麻田雅文	北大辞去	p. 29
	宮風耕治	夢の2年間	p. 30

\*都合により「ウェブサイト情報」は休載します。

---

2011年5月25日発行

編集責任 大須賀みか  
編集協力 家田修  
発行者 望月哲男  
発行所 北海道大学スラブ研究センター  
060-0809 札幌市北区北9条西7丁目  
Tel.011-706-3156、706-2388  
Fax.011-706-4952  
インターネットホームページ：  
<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/>

---